

A decorative graphic on the right side of the page. It features three large, overlapping circles in various shades of green (dark green, medium green, light green). Two thin, light green lines extend from the top left towards the circles, and another line extends from the top right towards the bottom right circle. The circles are arranged vertically, with the largest one at the top, a smaller one in the middle, and another large one at the bottom right.

ワイワイ教育プラザ

教育実践記録集

不登校、いじめ、学級崩壊、総合的な学習など、現場で様々な課題に挑戦する教育本部員たちの「実践記録」を紹介します。

目 次

一人をどこまでも大切に.....	3
共感的かかわりを欲している不登校に.....	7
子どもたちの笑顔が蘇った三年二組.....	9
ぼくたち、ナンバーワンだよ！.....	14
創造的な“学びの場”こそ.....	18
「新・人間教育への道」 歩け歩け「屋久島一周、歴史探訪の旅」.....	20
取りもどそう！ ホタルのすむ水 総合的な学習としての環境教育の実践.....	24
「子ども」「教師」「親」が共に学び合うこと 地域に根ざした学習へのこころみ.....	27
「世界市民」を育むためにこの夏休み、家の中から地球を再発見しよう！.....	28
地域に開いた幼児教育のネットワーク.....	29
輝け！ 地球サイズのボランティア・マインド.....	32
実践のなかで自信を取り戻した高校生たち.....	36
教師の元気が生徒を学校を変える.....	38
生徒の反発は私へのラブコール.....	42
校長室に用意したミルクとクッキーの話 「声かけ」から始まる“心の対話”.....	48
全面的に受容することで変わったA君.....	49
ウルトラマンティガのように.....	51
「座席表による授業記録」が教えてくれたもの 毎日のデータの集積で得た自己“再発見”.....	55
「はっとメモ」で見えてきた キラリと光る子どもの個性.....	56



一人をどこまでも大切に

溝江 貴紀 (宮城県・高等学校教諭)



「不安」と闘うヒロシに送った歌

七カ月の早産で生まれたヒロシ。生まれたとき、体重が七百グラムしかなく、手のひらに乗るリンゴ一個分の大きさでこの世に誕生しました。「うちの子は未熟児で生まれたため、さまざまな知的障害を持っています。とくに、小さなことに対して、すごくこだわりを見せるのです……」お母さんの表情はとても深刻でした。それでも、宮城県の高等学校を探しに探して、わが校を選んでくれたのです。

わが校は、県内ではめずらしい、昼間の定時制の普通高校です。修業年数は四年。ここ数年、わが校に入学してくる生徒は、ほとんどが小中学校時代に不登校だった生徒、知的障害を持った生徒、悪質な「いじめ」にあってきた生徒たちなのです。

私がヒロシに出会ったのは、教師二年目を迎え、新一年生の担任になったときでした。彼は、小学校時代、ありとあらゆるいじめにあってきました。そして、今度こそ、いい学校を見つけたと、とても喜んでいました。しかし、一学期に登校したのは、たったの二日間だけでした。

初めて彼の家を訪問したときのこと。私が来るのを心待ちに待っていてくれました。そして、両親から、彼の生い立ちを改めて聞かされると、やはり、幼い頃からいじめにあってきたことが、持病ともいえる不安を募らせているようでした。

私は、彼を安心させるべく、自分の小中学校時代をおもしろおかしく話したり、営業マンから教師に転職した理由など、いろいろな話をしたりしました。「今日は、一冊の小説を読んだ気がしました」と、彼のお父さん。その後、ことあるごとに、学校に連絡が入り、彼の様子をくわしく知ることができました。

ある日、ヒロシが家で急に暴れ出したと、お母さんから連絡がありました。私は急いで彼の家に向かいました。到着すると、お父さんもお母さんも疲れ果てていて、涙を流していました。話を聞くと、ヒロシは、家中の家具が次々と自分を目がけて倒れてくる不安に襲われたといい、こんな不安が続くのだったら、いつそのこと自分で倒した方がいいと我を忘れてかたっぱしから倒していったそうなのです。「先生、またこの不安が襲ってきたらどうしたらいいですか？」ヒロシが悲しそうな顔でたずねてきたとき、私は何としても彼を励ましてあげなくては、家族みんなを安心させてあげなくてはと思い、「よし、それなら先生が、『タンスは絶対倒れない』という歌を作ってあげるからそれを毎日歌ってごらん。そんな不安なんか吹き飛ばしてしまうから」と、無意識にそんな言葉をかけていました。「先生、本当ですか。お願いします。絶対作ってください」、その後約一週間をかけて、『タンスは絶対倒れない』という歌を私は完成させました。

タンスは絶対倒れない 倒れない 倒れない
 ヒロシも絶対倒れない 倒れない 倒れない
 それより大切なことがあるヒロシは決して一人じゃない
 若き翼よ さわやかに さあ 暁鐘を打て鳴らせ

ああヒロシの人生 意気高く

何度も何度も歌い直しながら、『ダンスは絶対倒れない』は完成しました。完成する何日か前に、彼は胃腸をこわし、病院に入院していました。クラスメートをつれ、病院に見舞いに行き、歌を吹き込んだカセットテープをヒロシのお母さんに渡しました。お母さんは、病院の中でその歌を流しました。私は、はずかしくて耳をふさぎましたが、ヒロシのお母さんは涙を流しておられました。

退院してからも彼の家には足を運びました。ヒロシは一学期ほとんど欠席しましたが、それでも「君と学校はつながっているよ」という気持ちは彼に伝わったようです。

彼は、「今まで生きてきてよかった。歌を作ってくれたのは先生が初めてです」と言ってくれました。私は、「不安なことがあればいつでも電話しておいで。コンビニと同じだから二十四時間 OK だよ」と、彼を励ました。



彼を絶対に元気にしたい！という思いで

その後、彼は精神の病が再発。何度も入退院を繰り返しました。病院から家に一分ごとに電話をかけ、同じ質問を繰り返し、お母さんにたずねるのです。寂しくて不安でたまらないのでしょう。しかし、お父さんもお母さんも疲れ果て、疲労がかなりたまっているようでした。「うちの子は、やはり世の中から隔離されるべきなのでしょうか……」電話口から元気のないお母さんの涙声……。私はかねてから作っておいた「ヒロシママがんばれ」という歌をプレゼントしました。

あなたが命をかけて生んだ小さな生命は
 あなたを困らせるほど元気に成長しました
 今はまだお母さんに甘えているけれども
 あの子はきっと知っているお母さんの笑顔を
 だからヒロシママ負けないで 僕はいつもそう祈る

彼の入院先にも何度も足を運びました。そして、病院からもらった薬は、一分一秒でも遅れずに飲まないで死んでしまう、という彼のこだわりをいやす歌もつくってプレゼントしました。そして、ヒロシの持つ生命の可能性を信じつつ、絶対、彼を元気にしたいとの思いで励ましを続けてきました。



詳細に記した家庭訪問の記録

私のクラスには、ヒロシのようなさまざまな障害を抱えた生徒が半分います。一体、教師としてこうした生徒たちになにをしてあげることができるのだろうか。自問自答の日々でした。その格闘の日々のなかで、私自身の人間教育のテーマを決めました。その一つは、学校に来ている生徒たちには、叱るよりも大いにほめてあげよう、感情だけで接することはやめよう、そして二つ目は、学校に来れない生徒たちには、保護者と連携をとって、とにかく家庭訪問に努めよう、ということです。

学校が終わると、私は毎日、家庭訪問に出かけます。多いときで三～四人。帰宅はいつも夜中の十一時を過ぎます。そして、毎日、家庭訪問の記録をつけ、土曜も日曜も関係なく、生徒たちに会いに行きました。

暴走族にあこがれて、学校をサボるカツヤがいます。わが校に入学して、一カ月くらいはまじめに登校していました。しかし、五月の連休明けくらいから学校に来なくなりました。いつも誰かの家に泊まり歩いている毎日で、どこにいるのか分からないし、連絡もありません。

「家庭訪問に努めようと決めたんじゃないか。家にいようといまいと保護者と連携をとっていこう」そう決めていた私は、週に一度、もしくは週に二～三度、彼の家に足を運びました。

初めて彼の家を訪れたのは五月半ば。行けども行けども彼の家に着けず、ラーメン屋さんで食事がたら道をたずねると、「あんた、学校の先生すか？ は～、カツヤの担任すかや。あいつ、はつぱ学校に来ねえすべ？ あれはだめだ。世の中の厳しさが分かってねー」そいいながら、彼の家をくわしく教えてくれました。彼は一～二才の頃、両親が離婚し、どちらにも引き取ってもらえず、祖父母に育てられてきました。

初めて訪問したときは、おじいさんもおばあさんもお酒を飲みながらうなだれていて、「カツヤの担任です」「先生、おら、孫だけは学校を辞めさせたくねーのっしや。だけどあいつは、はつぱ戻ってきやしねー、おら、くやしいんだよ！」そいうと、おじいさんもおばあさんも涙を流していました。

この涙を何としても笑顔にしたい、そう決心した私は、このときから家庭訪問の記録を詳細に記し始めました。

8月27日

深夜二時頃、警察より電話あり。カツヤ、シンナーを吸って補導される。深く謝罪し、明け方四時頃、彼を家まで送る。終始無言。そのまま眠らず、私は出勤、カツヤは欠席。猛烈に眠い。しかし、彼は両親から教育を受けていないんだ。だから、善悪の区別が付け難いのも無理はない。俺が何とかしてやるからな……。

9月6日

もう彼がいなくなって一週間。一体どこに行ったのだろう。おじいさんはなす術がない。「学校は辞めさせたくねーのっしや！」の一点張り。なんだかんだ言っても、孫がかわいいのだろう。おじいさん、僕に任せてください。

11月21日

カツヤから電話あり。「先生、じいさんに家おん出された。出て行けって。どこにも行くところないんです」急いで、迎えに行く。外は雪。コンビニで寒さをしのぐカツヤ。急いで車に乗せ、二晩泊める。久しぶりに二人で登校。クラスは温かく彼を迎える。久しぶりに見るカツヤの笑顔。この顔は父と母のどっちに似たのだろうか。

1月25日

カツヤを車に乗せる。さっきから一台の車が我々を迫りかけてくる。カツヤは震えながら「先生、後ろの車、俺を追かけてるんだっチャ。警察に逃げてける！」またしても何かやったのだろうか。「お前、またなんかやったのか！警察になんか逃げたら、いつか仕返しされるぞ。ここは先生に任せておけ」車を止める。

「私はカツヤの担任ですが」「オラたちはカツヤに用があんだ！先生にまで迷惑かけてすみません……」「ここは、

私に免じて彼を許してやってください」「…わかりました。コラ！カツヤ！お前、もう二度と嘘つくなよ！」

震えるカツヤ、ほっとする。「先生、ありがとうございます」「俺は、おまえの担任だ。だけど今度だけだかな！」初めて聞くカツヤからの「ありがとう」の言葉。実にうれしかった。



一人ひとりの生徒をどこまでも大切に

家庭訪問は四十回を超えます。できるだけ詳細に記した記録を振りかえると、当初、まったく消息の分からなかった彼が、困ったときには、私を頼ってくるようになっていたのが分かります。

営業マンだったときは、人がお金に見えていたこともあった私。過労で倒れ、救急車で運ばれた私。ノルマに追われ、いつしか二枚舌も使うようになっていた私。でも、今は違います。彼を通して、一人の人間をどこまでも大切にすることを学ばせてもらった気がしております。

そんな彼が「学校を辞めて働きたい」と言ったのは、今年(平成九年)になってから。祖父母の反対を押し切って、道路関係の仕事へ。学校を続けて欲しいとひたすら願う祖父母に、「三カ月だけ、やらせてみましょう」と、職員会議で決めた意見を話しに行きました。三カ月間、彼は一度も学校に登校しませんでした。よく電話をくれるようになりました。「先生、仕事、おもしろいよ！」「今日は、給料もらって、ばあちゃんに五万円預けたよ」など、とても張りのある声に、私は、嬉しいと同時に、悲しい気持ちにもなりました。

三カ月が過ぎて、家を訪問すると、なんと彼は一日も仕事を休んでおらず、祖父母も断念したのか、悲しい顔をしていました。とうとう、仕事を続けたいという本人の強い意志に祖父母も決断し、彼は、一年間を満了して、学校を退学しました。今も一生懸命に仕事に精を出しています。

先日、彼が学校に来てくれました。仕事が休みで、先生に会いたくなったからと言ってくれました。「僕は、この学校に来たからこそ、今の仕事に就くことができました」と校長先生に、堂々と、近況を語っていました。その言葉を聞いたとき、私は、彼との体当たりの一年間の結論を何とか見いだした気がします。学校は社会に出るためのステップなんだということを。学校を辞めても、私の教え子には変わらないので、今でも毎日彼の成長を祈っています。

教頭先生からこんな励ましの言葉をいただきました。「溝江先生、生徒が学校を辞めるという事実よりも、辞めるまでの間に何をしてあげられたかという行動の方が大事なんです。これまでずっと見てきましたが、あなたの行動こそ、いま最も学校や教師に求められていることなんです。自信を持ってこれからも取り組んでください」

まだまだ私のクラスには、多くの問題を抱えた生徒がいます。しかし、決してあきらめることなく、一人ひとりの生徒をどこまでも大切に、人間教育という永遠のテーマをもちながら、「生徒にとって最大の教育環境は教師自身である」との言葉を胸に、これからも生徒と共に成長してまいります。

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



共感的かかわりを欲している不登校に

岡村 初慧 (埼玉県)

苦手な授業を避ける A 子

不登校はいまや、どの子どもにも起こりうることです。本人の葛藤や苦しみはもちろん、親の不安や悩みも大きく、教師自身の器が問われることもあります。以前、中学二年生を担当したとき、不登校となった生徒がいました。A 子は趣味や価値観の似ている人とは話しますが、それ以外の人とは、積極的に話したり仲良くなろうとはしない生徒でした。

一学期が始まってまもなくのことです。登校途中に気分が悪くなり、そのまま家に戻ってしまったことがありました。初めての無断欠席でした。続いて、七月に行なわれる林間学校の登山への参加を断ってきました。母親に確認してみると、登山したくないの一点張り、林間学校にも行きたくないようだとのことでした。

本人と話し合うと、体力的に自信がないからだといいます。歩いて登校できる生徒なら誰でも登れる山だから心配ないことを説明し、学年で取り組んでいた朝マラソンに参加することを約束しました。しかし、林間学校には参加したものの、登山はけがを理由に欠席してしまいました。

二学期になると、A 子の欠席が目立つようになりました。特に体育祭の練習がある日に休みが多いようで、結局、体育祭は欠席したのです。登山と同様、苦手なものを避けようという印象を受けました。

その後、朝吐き気がしたり、胃が痛くなったりするようだと、母親から連絡がありました。レントゲン検査を受けたところ、神経性胃潰瘍でした。クラスに気の合う友だちが少ないため学校がつまらない、行きたくない。また家でも自分の部屋で過ごすことが多く、家族との外出もおっくうがるようで、これが神経性胃潰瘍につながったようです。

本人の立場にたったアドバイスが心を開く

A 子が登校してきたとき、私はなるべく声をかけて話を聞くようにし、家庭ともできるだけ連絡をとって、コミュニケーションをはかるようにしました。話をした後、内容をメモして、思いついたことや気になったことも別に書き込んでいきました。

メモを見て、私には「がんばろう」という言葉が多いことに気づきました。最初はどうしても、励まそうとするあまり、「がんばろう」と言ってしまったのでしよう。しかし、授業が終わるとすぐ教室を飛び出し、一年の頃の友だちのところに行く A 子を見ているうちに彼女を励ますよりも、気持ちをはかってあげることのほうが、大切ではないかと思うようになりました。

彼女が周囲に対して、わがままともとれる不満をもらすことがあっても、説教めいたことは言わず、「先生もその場にいたらそう思うかもしれないな」と共感を示し、A 子の立場や考えにたって、話しかけるように努力しました。

母親も、A子の不登校を機に変わってきました。公立の教育相談室に通い、カウンセリングを受けるうちに気持ちが安定し、A子との関わりもうまくいようになってきたのです。いっしょに買い物に出かけたり、家族で同じテレビ番組を見ながらおしゃべりするようになりました。



A子を立ち直らせた周囲の温かい目

A子は相変わらず学級での活動やグループ活動は苦痛らしく、まだ自分から話しかけることはほとんどありませんが、だんだん欠席しなくなってきました。学年の終わりには、A子は次のような作文を書いてきました。「この一年、ほんとうに先生のお世話になりました。クラスのことでも悩み、苦しんだ一年でした。でも、この体験は自分にとってよかったと思っています。同じように悩んでいる人がいたら、手伝ってあげたいと思います」A子にとって、不登校は苦しくつらい体験でした。幸い、A子はそれを乗り越えました。母親や先生という周りの大人の援助があったからです。

とかく、教師は生徒を叱咤激励しがちですが、まず生徒そのものを受け入れ、共感していくことが大切なことを実践記録から痛感しました。これからも、教育実践記録を続けながら、自分自身の人格を磨いていきたいと思っています。

『灯台』(第三文明社)より



子どもたちの笑顔が蘇った三年二組

川口 典恵（神奈川県・小学校教諭）

心の底を訴える子どもたち

忘れもしません、二学期も終わりに近い十二月七日、土曜日のことでした。

「川口先生。月曜日から三年二組を担当してください」

校長先生の突然の言葉に、頭の中が一瞬、真っ白になりました。

この三年二組は、今、教育現場に広がりつつある学級崩壊という緊迫した状態になっていました。そのため、心労が重なった担任の先生はついに療養休暇に入り、そのあと誰がこの大変なクラスを担当するのかと、同僚たちのいろいろな思いが飛び交うなかで、校長先生からの担任依頼だったのです。

実際にクラスに入ってみると、あまりのひどさに愕然としました。

子どもたちは始業のチャイムが鳴っても、まったく座ろうとしません。机の間を歩いて友だちにわざと足をひっかけて転ばせて喜んでいる子。嫌がる女の子の背中をとがった鉛筆で突いてもめている子。ノートを切って紙飛行機を作り、嫌いな相手をめがけて飛ばしている子……。

一カ所のけんかを収めていると反対側でまたけんかが起きます。それを取り囲んでプロレス中継のまねをして、はやしたてる子どもたち。会話のなかには相手を罵る言葉が飛び交い、女の子たちはあきらめにも似た雰囲気なかで能面のように無表情です。

混乱の中心的存在の大助君(仮名)は、学習にはほとんど参加せず、歩き回って人のノートや教科書にいたずら書きをしたり、床に座って漫画の本を読んだりしていました。騒然とした教室の中で、自分がいつ大助君にやられるかもしれないという恐怖で大助君の一举一動を凝視している武君(仮名)。彼は、大助君のいじめにあい、一度、死を選ぼうとしたことがあるのです。

初日はどっと疲れました。夜、一日の出来事を振り返りながら真剣な唱題を続け、祈りました。祈りつつ、考えました。“この子たちは、どうしてこんな姿になってしまったのだろう。何をどうすればいいのだろう——” 一人ひとりの行動をじっくり考え直してみました。すると、「現れる行動は違っても、みんな必死に自分の心の底を訴えようとしているのではないか。子どもたちは本当は自分の心をわかってもらえない苛立ちを、こんなさまざまな方法で訴えているのかもしれない」という思いがわいてきました。そう気づくと、「どうしようもない三年二組の子どもたち」という気持ちが消えていくではありませんか。そして、「理解できず、ここまで追い込んでしまって申しわけなかった」という思いが大きく広がっていきました。“そうだ！ 明日からは、子どもたちの心のあるがままに受け止め、寄り添ってみよう。どの子も心の底には良くなりたいという気持ちがあるはずだ。その心を信じ、真剣に子どもたちにつくしてみよう”と、決心したのです。

小さなノートの『えんぴつ対談』

私は、クラスを蘇生させるために、次の三つの対応を考えました。最初はクラス全体への対応、二つ目は混乱の中心的存在の大助君への対応、三つ目は大助君のいじめを恐れる武君への対応でした。そして、そのなかで遅れているクラス全体の学習を取り戻すことでした。

まず、全体への対応として、かさかさ乾き切った子どもたちの心を潤そうと、いちばん身近な言葉の指導から始めました。

日常的に「死ね」「ぶっ殺してやる」「地獄におちろ」などの言葉が教室に飛び交っていました。校長先生にお話すると、「僕もやりましょう」と進んで指導を引き受けてくださいました。教壇に立たれた校長先生は、一人ひとりに語りかけるように、「気持ちのよい言葉にはどんなものがありますか」と、問いかけました。子どもたちは、「ありがとう」とか、「こんにちは」とか、元気よく発表しています。ここで学習した言葉を模造紙に書き、三年二組の約束にしました。

また、相手を尊重するという気持ちで、子どもたち全員に「さん」をつけて呼ぶようにしました。子どもたちは最初は嫌がっていましたが、やがて「〇〇さん」と呼ぶことにより、返事をする子どもの言葉も丁寧になっていきました。さらに私自身、怒鳴ったりしないで、言葉づかいを丁寧にやさしい口調で子どもたちに話しかけました。そうすると、興奮していた子どもや心を閉じていた子どもが少しずつ心を開いて話をしてくれるようになってきたのです。

一人一冊の小さなノートを作り、学校での限られた時間では伝えきれないお互いの思いを書きつづる『えんぴつ対談』も始めました。

子どもたちは遊びのこと、友だちのこと、家族のことを、そして、それぞれのお家の方からは親の思いを、家での子どもの様子をと、さまざまな心が書きつづられました。

「先生、読んでね」と、ノートを毎日出す子も増え、そのノートに返事を書くのは、当然、夜中の仕事になりました。



子どもたちをしっかりと見ること

次に実践したことは、友だちを見る目を育てようとしたことです。教室の壁に「私だけが知っているお隣さんの良いところ」というコーナーを作りました。朝の会や帰りの会で友だちの良いところをカードに書き、掲示していくようにしていったのです。

十二月中は、子どもたちの友だちを見る目はすべて否定的なものばかりでした。そこで、道徳の時間に心を耕し、日頃から友だちの良さを意識して話題にしていきました。すると、三学期になってようやく「掃除を一生懸命していたね」とか、「友だちにやさしくなったね」とか、お互いの良さを見つけることができるようになっていきました。

さらに、帰りの会では、「今日良かったこと、うれしかったこと」、「今日の良い言葉」を話題にしました。トラブルが多いため、どうかすると暗く落ち込んでしまいがちな子どもたちも、みんなの前でほめられたり、お礼を言われたりすると、顔がしだいに輝いていきます。

私自身も、授業が終わり帰っていく子どもたち全員と握手をし、必ず「今日はきちんと返事ができましたね」「廊下をきれいに掃いていましたね」「〇〇さんにやさしくしていましたね」などと、一人ひとりに励ましの声をかけるようにしました。これは私にとって大変なことでした。毎日一人ひとりの子どもをよく見ていないと、その子にあった言葉をかけることができないからです。子どもにとっては、心を弾ませる一時になり、私にとっては、子どもをしっかりと見ざるをえない効果的な方法でした。

担任になって一週間が過ぎた頃、けんかが始まっても子どもたちはそれを囁かたてることはなくなっていました。しかし、けんかを止めようとはしません。ただ見ているだけでした。私は、自分たちで解決する力をつけなければと、「け

んかが起きたら見ていないで止めなさい」と、教えました。すると、戸惑いながらも何人かで止めるようになりましたが、モノを振り回す大助君を止める勇気はなく、けんかの相手のほうを止めたのです。それで収まるのかと思ったら、大助君はなんと、みんなに止められて動けなくなった相手を目がけて、よけいに攻撃をしかけます。

今度は、勇気を出して両方を一度に止めるように教えました。一人、二人では、とても止められません。何人もの力が必要なのです。最初はとても戸惑っていましたが、「わがままや、悪いことを許してはいけない。私と一緒に止めよう」と、一人ひとりに訴えました。上手にできたときにはすかさず、ほめ、「みんなで力を合わせればできるんだよ。私も応援するから、一緒に頑張ろう」と、励ましました。

休憩時間には、サッカーやドッジボール、大縄跳びなどをたくさん取り入れました。ゲームの途中でけんかが起きてゲームが中断することもありましたが、身近な生活の約束や善悪の判断、行動の仕方一つひとつ丁寧に指導していきました。



大助君が変わった！

全体の指導を続ける一方で、トラブルの中心になっていた大助君をなんとかしなければいけないと祈り続けていました。

大助君は、私がやさしく接していることをいいことに勝手な振る舞いを続けていました。興奮するとハサミやカッターナイフを手に友だちを攻撃します。興奮が高じて手がつけられなくなると、もう一人の先生の力を借りてようやく収めるという毎日です。

次から次と起こすトラブルに怒鳴って押さえてしまいたいと思うことが何度も何度もありました。何があっても冷静に、笑顔で話を聞くことは、まさに自分自身との闘いでした。

その大助君に、変化が見えてきたのは、一月の中頃でした。彼は、この日も興奮していました。落ち着かせてから、膝の上に抱き、大助君の体の温もりを感じながら、わが子以上の思いで話を聞きました。「大ちゃん、どうしてあんなに啓ちゃんをぶっていたの?」「だって、あいつ、何にもしてねえーのに、俺のことをにらむんだもん」「そうか。悔しかったんだね」「あいつ、許せねえーよ」「そうだね。それは啓ちゃんも悪いね。でもね、大ちゃんがあんなに啓ちゃんをぶっていると、先生は可愛い大ちゃんのことでも叱らなくてはいけないことになるんだよ」「うーん」「今度、頭にきたら、『先生、悔しいよ!』って言うておいで。そしたら先生から啓ちゃんに、ちゃんと注意してあげるから……」「わかった」と、言いながら、大助君はすっぽりと私の膝に入り、いつもと違って穏やかな顔と言葉で安心したように話をしたではありませんか。

それからは、友だちと派手なけんかをして、最後は私の側に逃げ込んでくるようになりました。

休み時間にする縄跳びなどにも、最初はまったく興味がない様子でしたが、三学期になると、みんなが跳んでいる姿を遠くから眺めるようになりました。まるで国語の物語に出てくる「ごんぎつね」の“ごん”のようです。

最後には、順番を守って跳んだり、失敗しても文句を言わないで縄を回すようになりました。

その姿は、まさに大助君が成長していく姿そのものでした。



私を支えた武君の言葉と笑顔

子どもたちへの取り組みで、ずっしりと重荷になっていたのは、三番目の武君への対応でした。私が担任する前のことですが、武君は大助君のいじめにあい、ついに「死んでやる」と叫びながら、三階の教室の窓から飛び出そうとしたことがあるのです。幸いにも大事にいたらずにすみました。しかし、武君は、翌日から登校しなくなっていたのです。

そして、私が担任になることになって、学校に出てくるようになったのです。

しかし、そのときのショックが大きく、小さなことに敏感に反応します。学習や休憩時間の些細なことに心の整理ができなくなり、その場に黙って座り込んでしまいます。また、学校に来て教室に入れず、しばらく廊下で話をし、気持ちを楽にしてから少しずつ中に入りました。

家でも、苦しかったときのことを思い出し、突然、震えながら泣き出すこともありました。彼の心の傷の深さを思いやると、安易な接し方はできません。

武君の心を大切に、放課後の時間を利用して、家族のこと、人間のすばらしさ、生命のすばらしさを話したり、本を読んであげたりしました。そんなとき、武君は満足すると、「先生、さようなら。また明日ね」と軽い足取りで帰っていきました。

子どもたちには笑顔で穏やかに接しながらも、心のなかは、一瞬一瞬が真剣勝負でした。昼間は極度に神経を張りつめ、夜は教材研究と『えんぴつ対談』への返事、さらに学級だよりを書くという生活です。私は、心身ともにぎりぎりの状態に追い込まれていきました。

一月の終わり頃には、教壇に立っていてもフラフラすることがたびたび起こるようになりました。三月まで体がもたないかもしれない。もう投げ出してしまいたい。でも、私が投げ出したら、子どもたちはどうなるのか。ここで倒れるわけにはいかない。この子たちが良くなることを信じて、やりきろう、と全力をふりしぼって学級経営を進めていきました。

そんな苦しい日々が続いていたある日。武君が、「先生、大助君がいたずらをしなくなったし、みんな明るくなったね」と、笑顔で言ったのです。この武君の言葉と笑顔が、私にとって暗闇のなかの一筋の光になりました。



子どもを信じることこそ

校長先生やたくさんのお僚に支えられて、ようやく三月を迎えました。

三月の初めには授業参観があります。私はいろいろと考えた結果、体育のサッカーにしました。自分たちで話し合っチームを決め、役割やルールを決める。準備、ゲーム、片づけなど、全部子どもたちにまかせて大丈夫ならいになりました。

トラブルもなくチームが決まりました。係の子どもたちは手際よくゼッケンを用意し、チームごとに大きな声で「よろしくお願いします」と挨拶をしてゲームを進めていきました。いつも心と行動がみんなからはみ出して目立っていた大助君、極度の緊張をする武君の二人もみんなと一緒に仲良くゲームをしています。春の光のなかで、カラフルなゼッケンと笑顔がコートを元気に走り回っています。

試合が終わると、素早く整列し、お互いのチームが「ありがとうございました」と爽やかな声で挨拶。お父さんやお母さんたちから、大きな拍手が校庭いっぱいに広がりました。

いよいよ三月末、私が担任になって四カ月。二カ月近く遅れていた学習も全部終わることができ、学年末の新たな旅立ちの時となりました。

社会科の発展学習として、家族の方を招いておだんごパーティーを計画しました。上新粉を練って丸め、串に刺し、七輪に火をおこしておだんごを焼きます。タレは私の手作りです。おだんごを丸める子、串に刺す子、可愛いエプロン

姿の子どもたちは笑顔で手際よく調理を進めていきます。香ばしいおだんごの匂いが漂うなかに、弾んだ声と幸せそうな親子の笑顔があふれていました。

家で待っている弟のために自分のおだんごの半分を食べずに、そっとくるんでいる子もいます。そうです。武君です。

楽しいひとときの最後に思いがけず、クラス役員のお母さんから、お礼の言葉とプレゼントをいただきました。家に帰って開いてみると、それは一冊のファイルでした。表紙にはピンクの布のカバーがかかり、「三年二組の思い出」という文字と可愛い二匹のカエルの刺繍があります。なかには子どもたち一人ひとりの思いと、家族の方の感謝の言葉がぎっしりとつまっていました。

どんな子にも良くなるとうとする心があると信じた教師に、子どもたちは正直に心と姿で応えてくれていました。言葉にならない感動に涙を流しながら、何回も何回も読み直しました。

私にとって、黄金の出会いとなった三年二組の子どもたちに、心からお礼の言葉を贈ります。

「子どもを信じるという教育の原点を教えてくれた三年二組の皆さん、ありがとう」

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



ぼくたち、ナンバーワンだよね！

瀧ヶ崎 幸子（千葉県・小学校教諭）

新学年から「崩壊学級」の担任に

「学級崩壊」という言葉は、ここ数年来耳にしておりましたが、どこか遠い所での出来事のように思っておりました。それが、千葉市の学習院といわれる我が小学校で突然始まったのです。

三年生のベテランの女性教師のクラスが、二学期に入り関西弁でまくしたてる一人の子どもを機に一気に崩れたのです。

関西から来た昭平君とすぐカッとなる卓哉君が喧嘩をしては暴れるようになりました。止めに入っても卓哉君は「バカ、ふざけるんじゃあねえ、昭平を呼べ、ぶっ殺してやる」と机やイスをひっくり返し暴れるのです。花瓶や黒板消しが飛び、ごみ箱の中味は散乱し、駆けつけてきた教務主任の腕にかじりついたり、ひっかいたりするのです。一方、昭平君は頭に血がのぼり「死んだらわ！」と叫びながら、二階のベランダの手すりの外側へぶらさがってしまったのです。この二人を取り巻き、はやしたてる子どもたち。見て見ぬふりをする子どもたち。おびえておどおどする女の子。何重もの取り巻きがでか大混雑です。授業が成立しないため、教頭や教務主任が教室に張りつくようになりました。親も心配して教室に来て見ており、担任はもうくたくたになっていました。

三月の中旬になると、クラスの親たちが「学級を解体して、再編成して欲しい」との要望を学校に出してきたのです。そんな折り、三月二十日、校長に呼ばれました。「研究主任として総合的学習を強く推進してくださっているヶ崎先生には申し訳ないのですが、ぜひ四年生のあのクラスの担任になっていただきたい。あなたの学級経営力で立て直しをして欲しい」と依頼があったのです。一瞬とまどいましたが私も三人の子どもを育てた母。人間教育の実践者としての自負もあります。「よ～し、あの子どもたちと一年間、勝負しよう！」と強い使命感をもって引き受けました。二十五年の教員生活のすべてをかけて、私は必ず子どもの心を開いていこうと決意しました。題目をあげながらどうすればよいか、なにをしてあげればいいのかと考え続けました。

子どもたちとの対面の日。子どもたち一人ひとりの自己紹介の後、どの子にも語りかけるように話しました。「一生懸命頑張っている子、おとなしい子、女の子たちが悲しい思いをするようなクラスはいけない。先生は正義の味方です。友だちっていいな、学校って楽しいなといえるクラスにしたい」と。子どもたちは、吸い込まれるように聞いていました。

次の日より、どんな事態が発生してもいよいよと体操着に着替えました。他の先生方とも連携をとって臨みました。授業が始まると案の定、大声で相手を罵る言葉が飛びかい、暴れ、一部の子どもたちが火に油を注いだようにはやしたて、教室は騒然となりました。私は毎日、なんとか、この子どもたちと心を通わせることができますようにと、一人ひとりの子どもの顔を思い浮かべながら祈り続けました。すると、いとおいしい気持ちかわき、こうもしてあげたい、ああもしてあげたいと慈愛の心がわいてきました。そして卓哉君も昭平君も責めるのではなく、心にすっぽりと包み込むことができるようになりました。

まず、学級会を大切にしました。どんな小さなことでも、子どもたちから出た問題には必ず耳を傾けてみんなで話し合いました。それから、日常何気なく使っている言葉遣いも気をつけました。私自身がゆっくりと大きい声で、できるだ

け丁寧に話すようにしたのです。「さあ、皆さん、こちらをご覧ください」「ちょっとお待ちくださいね」などと言うと、目を白黒させ、戸惑っていましたが、言葉とは不思議です。だんだん子どもたちも丁寧に話をするようになり、私のことを「お上品先生」と呼ぶようになりました。



四組さん、顔が変わってきたね

国語の時間のことです。卓哉君が突然手を挙げて「そういうのを五十歩百歩と言うんだよ」というので「どうして知っているの」とたずねると、「昔ね、兵隊が逃げてね……」といって、故事を通して胸を張って堂々と説明するではありませんか。クラスの友達も驚いています。私は感激して、思わずアンパンマンのようなほっぺを両手でなでてしまいました。後でわかったことですが、彼は年間二〇〇冊を読破する読書家だったのです。素晴らしい発見でした。

習字の時間、事件が起きました。それは掲示してある絵に激しく墨が飛び散っていたのです。すぐ話し合いをもち、その時の状況をみんなで思い出してみました。飛び散った墨は筆ではなくスポイトであり、それをもっているのは一人しかいないこと、その場所を通ったのも一人であることから卓哉君の名前があがりましたが、本人は、「やっていない」の一点張りです。私はここで、うやむやにははいけないと思い、いったん終わりにして給食後、別の部屋に呼んで、彼の両手を握りながら目を見てじっくりと話しかけました。この時を外しては彼のためにならないと判断したからです。

やがて、小さな声で「やったかもしれない」と言うのです。「やったかも知れないって、自分のことだからわかるよね」と言うと、しばらく考えて「ぼくがやりました」と言って細い目から大きな涙がこぼれ落ちました。初めて見る卓哉君の涙でした。彼は、三人兄妹で優秀な兄と、初めての女の子である妹に母親をとられ淋しかったのだと思うと、私の胸も熱くなりました。今までの彼の言動は自分に向けてほしいというサインだったのだと気づきました。その日以来、彼は「えびす様」のような柔らかな顔になり、友だちから「卓哉くん、目が丸くなったね」「やさしくなったよ」と言われ、校庭で友だちと元気よく遊ぶようになったのです。一方、昭平君ですが、面倒見のいい子なのにすぐカッとなり、やたらとみんなをしきろうとするのです。そんなとき、やさしく声をかけると落ち着き、自分のおかしさに気づくようになりました。彼は努力家です。がんばったことに対して、「字が上手になったね」「大きい声で発表して立派だね」と認めていくと穏やかになり、ひたすら努力するのです。

私は、クラスのどの子にも忍耐強く、誠意をもってかかわり、物事の分別についてはしっかりと教えました。この二人の変化と共に、子どもたちの心が少しずつ解けてきました。他の先生方からも「四組さんの顔が変わってきたね」「落ち着いてきたね」と言われるようになりました。



絵画コンクールで四人に一人が受賞

さて、私は始業式から、「授業が勝負」と決めて、学ぶ楽しさ、追究する喜びを味わうことができるように学習を進めてきました。三年生の時は、人の話を「聞かない」字を「書かない」何も「やらない」の三ないクラスでしたので、どの教科も丁寧にじっくりと取り組みました。三年生の時はほとんどの子の絵が完成せず、画用紙をちぎっては花さか爺さんのようにベランダからまいたり、教室を抜け出し、近くのグラウンドに遊びに行ったりして、図工は遊びの時間に等しかったとのことでした。

そこで私は、一枚の絵に子どもたちと共に全魂を傾けました。題名は「楽器を演奏する友だち」です。モデルをみんな

なの中から選び、服装は、自分の好きな色を使った柄物を家から持ってきてハンガーにかけ、どの服にするか選ばせました。どの子どもとても真剣です。

次に、下絵の構成、色ぬりの方法を具体的に教え、子どもたちの意欲を高めました。とくに卓哉君は、絵を描くのが大の苦手です。人間の形にならず、適当に描いてしまうのです。「モデルをよく見てね」と手をとって教えます。何度も何度も繰り返しやっと下絵を終えました。みんなの五倍かかりました。

色ぬりでは、髪の毛は、ぼつり真っ黒。目は異常にでっかく黒ぬり。口は赤色がにじんですさまじい形相。私はそのたびごとに彼をつれて流し場にいき、一緒に水で洗い落とし、乾くのを待つのです。彼は初めの頃はムツとしたり半べそをかいたりしていましたが、徐々に前向きになってきました。他の子どもたちも一生懸命です。一人ひとりのいいところをほめました。どの子どもなかなかのできばえです。最後に目を描くと、絵にパッと生命が吹きこまれて、「先生、すごいよ。生きているようだね」と口々に言うのです。

この全員の子どもの作品を絵画コンクールに応募したところ、八点が入選しました。つまり、四人に一人が受賞したのです。みんな自信をもちました。学習参観のおり、卓哉君のお母さんが「この絵、本当に息子の卓哉が描いたのですか」と言って感動していたのが印象的でした。

ある日の五時間目、午前中の緊張感と給食後のやすらぎが一気におそいかかり、疲れた顔をしていたのでしょうか。何人かの男の子が「先生、いすに座っていいよ」と言うのです。すると、教室中のあちこちで「いいよ。いいよ」と言う声に「ハッ」と我に返り、シャキッとしました。他人のことなどかまわず、自分中心だった子どもの心にやさしさが育ってきたことが、うれしくてたまりませんでした。



全員が科学論文を提出し大感激

学級経営の二つ目は保護者に、親子のふれあい、共同作業の大切さの理解を得ることでした。

私の学級経営において、最も重要な取り組みとなりました。それは夏休みに「一人一研究・科学論文」への挑戦です。実は、学級崩壊のおもな原因の一つに、親の教師への不信感があると実感していたからです。この不信感を信頼感に変えるチャンスととらえました。

私事で恐縮ですが、我が家の三人の子どもたちが、この十年間、科学論文に挑戦し、数々の賞をいただきました。昨年、高校三年の次女の「茶柱の研究」が、日本学生科学賞において「文部大臣奨励賞」をいただきました。そして、うれしいことに、アメリカで開催される「国際学生科学博覧会」で、日本の代表として発表しました。この研究がユニークな研究であるとして、日本テレビ『ズームイン朝』で家族共々紹介され、全国放映されたのです。

この放映をクラスの一人がビデオにとっていて、私の知らないうちにクラス全員の子どもの家に回覧されていました。途中から、大学ノートが付け加えられ、家族が感想を書いて一緒に回っていたのです。そのうち教室のあちこちで「私たちが夏休みにやってみたい」と言う声が聞かれ、意識がどんどん高まってきました。そしてついに「四組で自由研究発表会をしよう」ということになりました。親たちも、このビデオを見てこれまでの子育ての姿勢を振り返ったそうです。

もっと家庭で子どもと関わっていくことの大切さに気がついたとのこと。子どもたちが、「先生のお子さんの論文を見せてください」と言うのです。我が家のこれまでの論文と全国やアメリカに出品した論文を学校に持っていき、「自由研究相談会」を開いたのです。子どもたちは実際に手にとり「グラフや写真を使ってわかりやすいね」「字がきれいだな」と口々に発言し、目を輝かしていました。他の三クラスにも呼びかけ、四年生全体が大きく盛り上がりました。

長い夏休みが終わり、驚いたことに三十二人全員がそれぞれのテーマで科学論文に取り組み、一冊に仕上げを持ってきたのです。

私はこの時、感動で体が震えました。親たちも必死で応援して取り組んでくれたのだと思うと、うれしさもひとしおでした。この科学論文が、千葉市の総合展覧会においてなんと我がクラスから二点も入賞しました。実はこの二人は卓哉君や昭平君に続く学級崩壊の中核メンバーであった悟志君と大介君だったのです。二人は得意顔です。研究テーマは『鈴虫の観察』と『羽根と風の関係』です。子どもたちも大拍手をして喜び合いました。他人のことで拍手をしたり喜んだりすることなどなかった子どもたちが大きく変わり、一人ひとりの温かい心と心の交流ができたことを実感しました。いつの間にか、何事にも全力で取り組み挑戦するクラスになってきました。もともとパワーがあり、運動能力もあり、実によく遊ぶ子どもたちです。マラソン大会では全員が完走し、男女ともベストテンにたくさん入りました。

ある時、卓哉君がいました。「先生、ぼくたちナンバーワンだよ」と。「何が？」と聞くと、「だって、三年生の時は、先生方にも迷惑をかけて、だめなクラスナンバーワンだったけど、今は本当のナンバーワンだね」と目を輝かせながら話してくれるではありませんか。なんて、かわいい子どもたちなのでしょう。一人ひとりをだきしめたい気持ちでいっぱいになりました。三年生の時、集団万引きや空き家荒らし、恐喝などしていたなんて嘘のようです。



子どもたちからのすばらしいプレゼント

個人面接では、お母さん方が、我が子が嬉々として学校での様子を話し、遅くなっていく姿に心から感謝してくれました。

学校長は、会う度に「学級経営と研究の推進、ご苦労さま。すべてうまくいって安心しているよ」と言ってくさいました。

子どもたちと充実の日々を送っている時にうれしい知らせが飛びこんできました。「教育研究奨励賞」を社会科として女性で初めていただけるということでした。さらに、この度、文部省教員海外派遣の一員として、この秋、十六日間、オーストラリア、ニュージーランドに行かせていただくことになりました。こんなすばらしいプレゼントを四年四組の子どもたちがくれたのだと心から感謝している毎日です。

子どもたちは、教師が自分の幸福を願っていることを感じたからこそ、信頼もし、心を開いてくれたのだと思います。さらに、教育者としての使命と誇りを持ち、二十一世紀を子どもたちと共に歩んでいくことをお誓いし実践報告といたします。

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



創造的な“学びの場”こそ

塩見 浩二（北海道・高等学校教諭）

池田先生は「教育提言」の中で、「創造的な“学びの場”」の確立、「人間性を養うための教育」が大切であり、そのためには「社会での実体験」を通じた教育こそ必要であると訴えられています。私もこの指摘こそ教育現場を鋭く見通した至言であると拍手を送る一人であります。

私がオロロン島の島として有名な天売島の夜間定時制高校に赴任したのは、今から五年前のことです。全校生徒は十七人。私は一年生の担任となりました。

クラスといっても生徒数は三人。土木工事に従事する A 君。島に戻り、編入してきた B 子さん。人とのコミュニケーションが苦手な C 子さん。

昼間、島の大事な労働力として汗にまみれて働き、疲れて登校してくる生徒たちに会話はなく、心が通い合うクラス運営はままなりませんでした。

私は、何とか心が通い合う、生き生きとしたクラスにしたいと悩みました。そのなかで、私自身が水産クラブの顧問であり、本校生徒が毎年、三年生になると出場している「北海道高等学校水産クラブ研究発表大会」の活用を思い立ちました。

離島では、幼い頃からの仲間としか付き合いがありません。まして大勢の前で発表するという機会など全くありません。したがって、対外的な行事に参加する意義は大きく、担任と三人の生徒が一つのテーマに向かって協力して成果を作り上げることは、大きな達成感と自信につながると考えました。

「出場するからには優勝を目指そう！」とクラスの生徒に呼びかけ、大会の一年前から研究をスタートさせました。生徒と議論を重ねるなかで、「天売島におけるコウナゴ漁の今後について」というテーマに決定しました。

コウナゴとは体長一～二センチの小魚です。島に繁殖する百万羽もの海鳥たちの餌となるだけでなく、地元の漁師にとっても、最盛期の漁獲高は一億円を超える大切な漁業資源でもあります。

しかし、近年は水揚げが激減。海鳥にとっても、人間にとっても、深刻な問題となっています。

私たちの研究は、その原因を探ろうというものでした。漁業関係者にも難問で、生徒は「犯人捜し」のように興味を持ってたようです。

コウナゴを子育ての餌としている海鳥の個体数調査や漁協、水産試験場、地元の漁師への取材と、目覚ましい集中力で研究は進み、一年がかりで、ついにまとめあげました。

大会参加の六校十三学科は、水産高校か水産科がある高校ばかり。普通科での参加は天売高校だけでした。しかも水産高校は校内予選を勝ち抜いての出場でした。

それに対し三人は、昼は汗にまみれて仕事をし、夜は学校の授業。発表のための研究は、少ない時間をひねり出すようにして、積み上げてきたものです。

そうしたなか、生徒たちは物怖じすることなく、堂々と発表しました。そして見事、「全道一」の栄冠に輝いたのです。

私たちは優勝旗を携えて天売島に帰島。港では「全道優勝おめでとう」という横断幕が迎えてくれました。

この体験が、“やればできる”という自信になったことは言うまでもありません。その後、A 君は生徒会長に、B さんは副会長に、C さんはボランティア委員長に、と大活躍でした。

卒業式の日、A 君が答辞で語った言葉が忘れられません。

「先輩として伝えておきたいことがあります。それは、この高校で学んだことを誇りに思っしてほしいということです」

池田先生は提言のなかで「自らの行動が社会で役立っていると実感する経験は、子どもたちの自信となり、心の成長の確かな礎となっていく」と言われています。

三人の生徒とともに取り組んだ研究発表大会は、私自身にとっては、池田先生のこの言葉を深く実感させるものでした。

『大白蓮華』2001 年 1 月号より



「新・人間教育への道」 歩け歩け「屋久島一周、歴史探訪の旅」

若松 京子（鹿児島県・小学校教諭）

四泊五日の徒歩の旅

昨年末に「世界遺産」に登録された屋久島は、鹿児島から約 140 キロメートルの沖にあります。かつては深い海底にあった岩が隆起した島で、周囲は 105 キロメートル。面積は、504 平方キロメートル。九州第一の高さを誇る宮之浦岳を中心に重なり合う山々が、そのまま海岸からそそり立ち「洋上アルプス」の名を持つ山岳島でもあります。

しかもこの小さな島に、2500 キロメートルにおよぶ南北に長い日本の自然が凝縮されていて、植物や魚の種類は日本一だと言われています。島の人たちは、この屋久島のかげがえのない豊かな自然と、素朴な人情を島の誇りとしています。

屋久島には、縄文杉などの大自然を守るために、島の人たちが独自で作った環境保護のための“憲法”まであります。さらに、その昔「朝廷に自分の意見を申し立てて」罪に問われ、流罪になった人たちなどを温かく迎え入れた素晴らしい歴史もあります。“人にも、自然にもやさしい郷土”というのが、屋久島の姿です。そんな郷土・屋久島の資料をあらためて読み返していた昨年（平成 5 年）、一つの思いが私をとらえました。上屋久町立宮浦小学校で 6 年 1 組を担当した時のことです。

それは「昔から“郷土が人間を育み、人間が郷土を守っていく”と言われるように、この屋久島にある、素晴らしい人と自然の調和の歴史を、子どもたちと一緒に学んでみよう」ということでした。そして小学校の卒業の思い出に、島の人たちが守ってきた“歴史のなかの屋久島”を、ぜひ子どもたちにもしっかり見てもらいたいと思ったのです。

島の子どもたちは、せっかくこの素晴らしい屋久島で育って高校まで行っても、ほとんどが卒業と同時に鹿児島や大阪、東京に出て行きます。そんな子どもたちに、この島を深く胸に焼きつけておいてほしいという願いが、私にはありました。

クラスで、さっそく、提案しました。「みんなで屋久島の歴史を調べてみようか」「先生、どげんして」「うん、この屋久島には、素晴らしい歴史があるの。みんな知らないでしょう。だから、島に残っている史跡を訪ねたり、歴史のいわれを聞いて勉強するの」「先生、それおもしろかー」子どもたちは大賛成です。それからいろいろな意見が飛びかいました。そして、やっと結論が出て、みんなで歴史を学びながら、島を一周することに決まったのです。

その方法でも、意見百出でした。「駅伝みたいにバトンタッチして行こう」「バスを借り切ってみんなで行こう」「バス代は高いから自転車がいい」と、大騒ぎです。次々に意見が出ましたが、相談の結果、一周約 100 キロメートルを 4 泊 5 日で歩いて行こうということになりました。



自分との闘いは続く

それからが大変です。計画はしたものの、私自身、自分の体力に不安を感じてならないのです。“えらいことを計画してしまった”“後悔先に立たず”です。しかし“えい、がんばるしかない！”と腹を決めました。

さっそく学級 PTA で親の承諾をとり、関係者に応援をお願いし、みんなで、まず歩く練習から始めました。3 ヶ月先の本番をめざして、毎週日曜日ごとに距離を延ばしながら歩く練習を重ねていったのです。時にはお母さんたちも加わり、帰りには山菜取りに早変わりする日もありましたが、7 月には 20 キロメートルの行程を三回、予行練習することができました。

その間に、宿泊の交渉や郷土史家の方をお願いをしたり、細かい打ち合わせをしていき、夜は、子どもたちの全員参加と絶対無事故を願い、一人ひとりの顔を思い浮かべながら題目を送りました。

そして迎えた 1993 年 7 月 27 日の午前 10 時 30 分。いよいよ出発です。心なしか緊張している子どもたちと、校門の前で記念撮影をして、「屋久島一周、歴史探訪の旅」の横断幕も勇ましく、クラス 28 人全員、元気よく歩き出しました。

10 キロメートル歩いたところで小休憩。郷土史家の方に話を聞きました。近くから出土するという縄文式土器やその土器にこびりついて発見された真っ黒に焦げた木の実など、当時の人々の暮らしぶりがうかがえるものも、手にとって見ることができました。

焦げた木の実を見た A 君が、「先生、昔の人もうちのお母さんと似た人がいたとやねー」と、言います。「どうして？」「慌て者で、おしゃべり好きで、つい忘れてお鍋を焦がしたりしてー」郷土史家の先生も「慌て者のお母さんが焦がして、腹を立ててガチャンと投げ捨てたのかも」と説明してくださいました。一つの土器が、わが家の生活につながる楽しい歴史の勉強に、みんなの顔は、生き生きとしています。

そこから、さらに 10 キロメートル歩いたところが最初の宿泊地です。近くの川でお風呂代わりに行水となりました。夕日を見ながら、さわやかにシャンプー気分。「でっかい風呂だよ」とはしゃぐ男の子たち。「土手のおうちの人が見ちょいよ。まっ、気にせんが」と照れる女の子。夕食後は、晴れた夜空を見上げ、星座の学習もしました。

2 日目は、あいにくの大雨。用意してきたカッパやレインコートを着て、28 キロメートルの林道を歩きます。事前に下見した水飲み場は、大滝になっています。思わぬところに次々と滝ができており、大岩を越えて道路に落ちてきます。自然の変化の凄まじさに驚きながらも、子どもたちは「こんな日に歩いているのは僕たちくらい。猿も出てこんよ」と、笑い飛ばします。

しかし、3 日目になって“歩ききれかな”と心配な子どもたちが数人出てきました。股ずれや足にマメができた子もいましたが、その日は 13 キロメートルの行程。無理をせず、温泉で疲れを癒し、元気を取り戻したのです。

4 日目は 19 キロメートルの道程です。もう半分以上歩いてきて、あとはひと踏ん張りです。股ずれを起こしている子も、マメを大きくしている子も、一歩また一歩と、一人ひとりが自分との闘いです。



みんなの応援に疲れも飛んで

そんななかで、途中で会った人たちから、「あらあ、新聞に出ていた屋久島一周でしょう。がんばってね」と、声をかけられました。私たちのことは話題として、地元の南日本新聞に紹介されていたのです。もう島では小さなスターです。知らない人が声をかけてくれます。それがうれしいらしく「僕たち有名人じゃね」と子どもたちは大喜び。おじさん、

おばさんの温かい激励に、足の痛みも疲れもはね飛ばして、また元気を出して歩きました。

4 日目が過ぎて、いよいよ最終の日。幸いなことに、一人の落後者もなく、全員元気です。どうかこのまま全員が無事故で歩き通せますようにと祈りながら、迎えた最終日は、朝から真っ青な空が広がっています。

私は、出発の日から張り詰めてきた気持ちをさらに引き締めながら、一人ひとりの子どもたちの心のなかに、何か一つ素晴らしい思い出を残してくださいと願いました。

この日は、校長先生も一緒にゴールまでの 20 キロメートルを歩くことになりました。

最終コースを少し歩いたところで、一人の男の子が言いました。「先生、僕たち本当に屋久島を歩いて一周したんだね」「うん、そうだね」と、言いながら、私は胸がいっぱいになっていました。“この元気にがんばる子どもたちを見てください”と大声で叫びたい気持ちになりました。

いよいよゴールの学校まで、あと 3 キロメートルになった時のことです。「あと三キロ、がんばれ！」と書いた紙が電柱に張ってあるのです。そして「がんばれ！あと二キロ」「あと一キロ、がんばれ！」と続きます。

みんなの応援と真心に疲れも吹き飛びました。その電柱の激励文に背中を押されるように、足取りはますます軽くなります。そしてあと 500 メートルになった時、クラスの歌が始まりました。松山千春の「大空と大地の中で」という曲です。「果てしない大空と 広い大地のその中で いつの日か 幸せを 自分の腕でつかむよう 歩きだそう…」歌詞は、島一周をやりとげたクラスにとってピッタリの内容です。

そして、いよいよゴールの学校です。

先頭の子どもが到着すると同時に、校門で迎えてくださったお母さん方の手から一斉にクラッカーの破裂音とともに紙テープが飛びました。妹や弟たちが書いたという「ゴール、おめでとう」の垂れ幕も躍っています。

ゴールイン式では、子どもの代表がお父さんお母さんのおかげで、無事一周できたことを感謝し、お礼の挨拶をしました。

校長先生は「20 キロを一緒に歩いてみて、その大変なことを実感して、全員が全員、よくぞ 100 キロを歩けたと、今さらながら感心し、感動しています」と挨拶をしてくださったのです。

思えば準備段階から不安はたくさんありました。その一つひとつを乗り越えることができたのは、保護者をはじめとする関係者の子どもたちを思う“真心”と“団結”というほかはありません。



島一周の旅が成長のきっかけに

この歴史探訪の旅を通して、多くの郷土史家から聞いた話は、ほとんどすべてが初めて聞く興味深いものばかりでした。屋久島に多い姓の「岩川」の起りや、流罪された歴史上の人物と島のかかわりなどを知り、郷土を学ぶ喜びを味わいました。

島一周を終えてから、子どもたちは一歩も二歩も成長したように思います。なによりも島の歴史や物語に興味をもってくれるようになりました。歴史上の人物についても、自分で積極的に資料を調べてくる子どもが増え、私の知らない質問も多く、たじたじとなることもありました。

特に S 君は、その後大きな成長を見せてくれました。S 君のお母さんは、はじめ S 君が島一周に参加することに反対だったのです。というのは、S 君は内臓の病気で小さい頃から薬を服用しており、疲れると副作用が出たからです。しかし、S 君がどうしても参加したいということで「毎日薬を飲むこと」を条件に参加させてもらいました。

しかし、島一周の期間、S 君は元気いっぱい、薬を飲むことも忘れてしまうほどでした。結局、そのことがきっかけ


で、日常でも完全に薬から離れて健康に自信を取り戻しました。

歴史の勉強にも一層努力するようになり、2学期の半ば頃には、クラスみんなが社会科に関しては一目置くようになったのです。そして、3学期の社会科テストでは全部100点でした。それと同時に、1学期は20点や30点だった算数もグングンよくなり、2学期には、60点から70点を取れるようになりました。

S君は現在、中学1年生です。大好きな歴史の勉強とともに、他の教科にも意欲的に取り組んでいます。島一周した子どもたちは、卒業後も時折、近況報告などしてくれます。

今年(平成6年)の4月から、島永住を決めて新居を構え、現在の小学校に転勤となった私は、身も心も心機一転。前任校での体験を生かし、日一日と成長著しい子どもたちに負けず、どこまでも人間性あふれる教育のできる教師に成長していきたいと願っています。


『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



取りもどそう！ ホタルのすむ水

総合的な学習としての環境教育の実践

瀧口 稔（山口県・小学校教諭）



生命と「いのち」のふれあいの場

山口県防府市の華浦小学校は、住宅や工場が立ち並ぶ、市内で最も人口密度が高い地域に位置する。一級河川である佐波川からの豊富な水流も、コンクリートで固められた用水路に流されるのみで、かつての自然豊かな川の情景は失われている。もちろん、ホタルなどどこにも見当たらない。

それは、何気ない一言から始まった。平成九年三月、学校の片隅にある小さな池の前で、四年生の子どもたちと桜の木を観察していた時のこと。桜の枝からふと下に目をやると、真っ黒い水面に生き物の気配すら感じられない池が目に入った。私は、思わず「きたない池だね。真っ黒だね」としばらく子どもたちと眺めていた。そして、ふと「ここにホタルでも飛んだらきれいだろうね」とつぶやいていた。次の瞬間、「飛ばしてみたいな！」と目を輝かせた子どものその一言が、すべての始まりとなった。

ホタルとは、まったく縁のなかった私は、ホタルが何を食べるのかすら知らなかった。ただ、ひたすら、図鑑や資料を調べていった。子どもたちも、自発的に図書館に通いホタルの勉強をした。そして、みんなでその池にホタルが棲めるせせらぎをつくった。本を片手に、人工ふ化にも挑戦した。初めて見る二〇〇〇匹ものホタルの赤ちゃんのあまりの小ささに、みんな目を丸くした。

そんな子どもたちの中に笑うことを忘れてしまった A 子の顔もあった。A 子は、四カ月前、家庭の事情で他の学校へ転校していった。それがわずか一学期間だけで、再び戻ってきたのである。度重なる不幸に家庭が襲われ、傷ついた心を懸命に立て直そうとする A 子の姿に、私は何としても応えたかった。幸いにも、前担任である私のクラスへ、本人と母親の強い希望で再び入ることになった。動物好きで心の優しい A 子は、自らの心の隙間を埋めるかのようにホタルの世話に取り組み始めた。朝、業間、昼休み、放課後と欠かさずホタルの飼育場に顔を見せ、ひょうきん者の B 夫たちと一緒に餌のカワニナの殻を割って幼虫に与えたり、残った食べかすの掃除などをした。「飼育場」といっても、お金も場所もなにもない私たちは、壊れた流し台を校舎の床下に置き、そこに地下水を流して「人工飼育場」にしていた。そのため、よく天井で頭を打つこともあったが、その狭い空間は、子どもたちとの絶好のふれ合いの場となった。

A 子とは、学校のこと、友だちのこと、家庭のこと、将来のことなど、さまざまな思いを語り合うことができた。また、そこで出会った同級生も下級生も、そして、物言わぬホタルまでもが、彼女にとって欠かすことのできない友人となった。A 子は、病気で体が真っ白になったホタルのことを、自分の友だちを気遣うように心配した。すぐに「ホタルの病院」に入院させ、毎日餌やりと掃除を欠かさなかった。残念ながら、途中で息絶えた幼虫が見つければ、その親ホタルが眠る「ほたるの墓」に手厚く葬った。夏休みや冬休みにも頻繁に顔を見せ、世話を続けた。私は、頭の下がる思いで、すっかり元気を取り戻した A 子を見守った。学年の終わりに、手作りの感謝状を手渡した時の A 子の笑顔は忘れら

れない。

こうした、ホタルを通した子どもたちとのつながりは A 子だけではない。ときには、学年を越えて、多くの子どもたちとの接点をつくることができた。ホタルの飼育活動を通して、子どもたちは自然への愛着はもちろん、友だちや物言わぬ生き物までも、心の中で対話することができたのであろう。そして、何より私自身が、子どもたちから生命と「いのち」が触れあうことの素晴らしさ、尊さを教えてもらった気がした。この実践に取り組んだ最大の成果であった。



ホタルの夢飛ぶ学校づくり

毎日の餌やりやカワニナ取りなど、順調に人工飼育の活動が進むなかで、成長したホタルの幼虫を地域の用水路に放流すること、校内に新たにホタルの川を整備してそこに放流しようという意見が、子どもたちの中から出されるようになった。

そこで、総合的な学習として位置づけることにし、地域の環境を知りホタルを放流するためには、どうすればよいかを考え、行動していく学習活動を展開していった。まずは、子ども環境会議を開いて地域の川の実態調査を行うこととし、化学的な水質検査や聞き取り調査をもとに、今、自分たちにもできることを話し合った。その後、川の清掃活動や用水路のそばにある防府高校の生徒会への呼びかけなども行い、その行動は地域に大きな反響を呼んだ。

一方、校内のホタル川づくりでは、子どもと教職員、さらには地域の有志が一体となって整備を進め、全長十メートルほどの小川が完成した。そして、数百匹のホタルの幼虫を地域の川と校内の川へ放流することができたのである。

平成十年四月二十八日。ホタルを夢見て一年と一カ月あまり。ついにこの日、二匹のホタルが舞った。みんなの夢が、現実のものとなって校庭の手づくりの小川に舞ったのだ。私は、呆然とその場に立ちすくんだ。その淡い光に吸い込まれていくように顔を近づけていった。涙が後から後から流れ落ちた。その後、ホタルは次々と数を増し、初夏にはまだ早い五月の中頃、一斉にホタル川を飛び立ち、見事な光の競演を繰り広げたのである。その数、約一〇〇匹。これまで、苦労を重ねてきた子どもたちも私も、涙なくしてその光景を見つめることはできなかった。この年確認されたホタルの数は、三〇〇匹にも達した。




ホタルとともに輝く心

ホタルの飼育活動が始まった当初は、「この学校にホタルを飛ばすなんて、そんな夢みたいなことを……」と心ない言葉を浴びせられたこともあった。私自身、周囲の無理解の壁に、心も体も痛めつけられた時期もあった。しかし、子どもたちはそんな夢のようなことを見事に現実のものとしたのだ。このことで、周囲の雰囲気は一変した。その後、地元の大企業からは活動費用の協力の申し出があり、規模の大きな飼育池と川の工事を行うこととなった。もちろん、工事といっても自分たちの手づくりで、毎日スコップを片手に、多くの子どもたちが集まってきた。額に汗する彼ら(彼女ら)の顔は、みんな輝いていた。そのまばゆいまでの横顔は、生命の底から発する輝きそのものだった。そして、ついに全長三十メートル近いホタル飼育水路が完成した。さらには、ホタルの飼育活動の話聞き感銘を受けたという近くに住む鋳造家の方から、ホタルの銅像を製作し寄贈したいとの申し出があり、子どもたちとともにその原型を粘土で作り上げていった。

平成十一年三月、みんなの思いが小さなホタルの銅像となって結実した。飼育活動を終えた今でも、見守るよう

にホタル池のほとりにたたずんでいる。この池から、未来に向かって美しい光を放つホタルが飛び立つように、たくさんの子どもたちが、未来を照らす希望の心を胸に抱きながら、巣立っていく日が来ることを願わずにはられない。

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



「子ども」「教師」「親」が共に学び合うこと 地域に根ざした学習へのこころみ

橋本 和男（神奈川県）

何かに興味を持ち、何かを達成したり、発見したときの子どもたちの顔は実に董い顔藹をしています。私は日ごろから、子どもが主体的に学習意欲を燃やせる授業を心がけています。学校が海と緑の美しい湘南地域にあるところから、なるべく郷土の歴史や文化、出来事を教材に取り込み、身近なところから関心を持って学習できるような工夫をこころみしています。

あるクラスでは、鎌倉時代を教科書で勉強したことから、皆が興味を持ったテーマをグループごとに分け、歴史の名残を伝える古都・鎌倉を実際に歩いて研究学習することにしました。これは、担任一人で引率はできませんので父母にも呼びかけて協力をお願いしたところ、予想をはるかに超える学習成果をあげることができたのです。現地への探索を前に、子どもといっしょにお母さん方にも参加していただき「ミニ歴史学習会」も持ち、各グループの担当も決めました。父母の皆さんは子どもたちとともに、図書館での資料収集や下見など、積極的な応援をいただき、親子が協力し合っの学習は大変な盛り上がりのなか無事故で大成功をおさめました。

参加した父母から寄せられた感想も好評でした。「子どもたちが自主的に課題を持ち、解決していこうと努力する姿を間近にでき、頼もしく思えました」「子も親も本当に楽しめました。グループの一人ひとりがテーマを持ち、しっかり考えて行動できたからでしょう」「自分の子ども以外とも接する機会が与えられたことも良かった」と。各グループの発表内容はどれも教師の私も教えられることが多い素晴らしい内容でした。子どもが本気を出すと大人も教えられることを改めて実感させられました。

『グラフ SGI』（聖教新聞社）より



「世界市民」を育むためにこの夏休み、 家の中から地球を再発見しよう！

田川 寿一（広島県）

サッカーの世界カップは、日本中をわかせた。テレビのブラウン管からは、三カ国それぞれの参加チームの熱戦ぶりがリアルタイムで放映され、子どもたちにも世界が身近になっていることを実感させた。しかし、日本とこれらの国々とは、どれほど深い関わりをもっているかを知る子どもは少ないだろう。

国際化時代を迎えた今、子どもたちには、世界の人々は深いつながりをもっていて互いに助け合わなければ生きていけないことを学ばせたいと思う。それが、世界市民としての意識をはぐくむことになり、平和教育になるから。

例えば、それは我が家でもできる。世界カップの参加国のことを百科事典や地理事典で調べてもよい。きっと、どの国とも、日本がさまざまに結びついていることが分かるだろう。また、もつと身近な日用品や料理の材料などがどこの国から来たのか調べるのもおもしろい。ふだん着なれたTシャツが中国製だったり、食べているカボチャがトンガという国から来ていたり、新しい発見と驚きに子どもたちは目を見張るに違いない。ほかに、愛読する童話や好きな音楽など、子どもが興味をもっているものから目の前に世界を開いてあげるのもよい。

この夏休み、我が家の国際理解教育として取り組んでみてはどうだろう。親子で一つの課題に向き合って、これまでできなかったような対話ができ、きっと素晴らしい夏の思い出がつかれるのでは。

『グラフ SGI』（聖教新聞社）より



地域に開いた幼児教育のネットワーク

樋口 節子 (愛知県・幼稚園園長代行)



ある事件がきっかけで始まった「母親クラブ」の活動

あれは、五年前の十二月。ある真冬の夜のことでした。当時、私は児童館の館長をしておりました。「先生、助けて！」中学一年の和男が児童館に駆け込んできました。「先生！ぼく、もう耐えられない。おやじが、ぼくに言ったんだ。『お前が出ていか、お母さんが出ていかだ』って……」「そう、つらかったわね……。学校の先生にはちゃんと話したの？」「学校の先生じゃだめだ」日頃よく児童館に来ていた和男が、すっ裸でアパートの外に放り出されるという事件が起きたのです。「虐待」という言葉が新聞紙上に登場するようになった頃でした。食事をろくにさせてもらってない、一歳の弟の子守を強要され、弟を泣かすとせつかんを受ける。痩せ細った体をますます小さくしておりました。

たび重なる出来事に、さっそく児童相談所と連絡をとり、施設に収容していただくことになりました。和男は、もともと頑張り屋で頭のいい子でした。将来は調理師になりたいという彼に、一生懸命頑張れば施設からでも学校にいけるからと励ました。その後も何度となく施設を訪問し、和男を励まし続けました。ところが担任の先生は、どうしたらいいのかわからず、児童館の私のところに電話で、「和男はどうしているか、担任としてぼくは何をしたらいいか」と相談してきました。こうして和男をめぐる、たくさんの人たちがかわかりました。しかし、努力もそこまです。この和男の事件を通して教師一人の指導の限界、そして、家庭の中まで入り込めないもどかしさを感じながら、私にできることは、ただただ和男の幸せを祈るばかりでした。このとき、一人の子どもを守る地域の支援やネットワークの必要性を痛感させられました。

以来、私は、学校が終わった子どもたちの遊び場でしかなかった児童館を「地域の子育てを支援する場にしたい」と強く思い始めました。そんななかで始めたのが「母親クラブ」の活動でした。

ある日、こんなことがありました。「ギャア！先生え！」わあわああと泣きながら、三歳の男の子をもつ星野さんが事務室に飛び込んできました。驚いた職員は、一斉に振り返ります。よく見ると、星野さんの顔はひっかき傷でいく筋も血がにじんでいます。「あらっ、星野さん、どうしたの？」と私は、彼女の背中をなでながらその手をぎゅつとにぎりしめました。「だって、たっちゃんがちつともみんなと一緒にやらないから……。やらせようとしたらかきむしられたの。ああ私、もうどうしたらいいかわかんないの。先生、助けて！」と。そこで、彼女と共に親子遊びの部屋に行ってみました。

そこにはたっちゃんが、ぼんやりと立っていました。その姿を見ながら、「ほら、遊びのなかに入っていなくてもね。みんなの遊びを一生懸命見てるでしょ。あれでもたっちゃんは、十分楽しんでいるのよ。あわてなくてもいいの。大丈夫よ」と星野さんをなだめるように語りかけました。すると私に、自分の母親が亡くなってから子育てが分からなくなってしまったこと、精神安定剤を飲んでいること、夫の協力がいないこと等をぽつんぽつんと話してくれました。

その日の活動終了後、参加していた親子の五、六組が、たっちゃんと一緒に、みんなで遊び始めました。「大丈夫よ、ほら、小さいグループになると、あんなに喜んで遊んでいるじゃないの」と仲間のお母さん方も励ましてくださいました。そして、まもなく彼女は、この仲間の親たちに支えられ生き生きと親子で活動に参加するようになりました。たっちゃんのお母さんは、やがて、わが子が保育園に行くようになると、保育園の「母の会」の役員として、嬉々として活躍

するようになったのです。



地域コミュニティの広場としての児童館

このように、母親クラブで活躍するお母さんの成長した姿が、そのまま子育てへの自信となり、子どもたちも元気に育っていくようになり、本当にうれしく思いました。子どもが仲間と一緒に触れあう単なる遊び場としての児童館から、母親クラブとして、子育て支援の場となった児童館。これをもう一歩広げた「地域コミュニティの広場」としてなにかができないだろうか、と考えを広げていきました。

友達と遊ぶといっても、共にかかわって遊ぶことを知らない子どもたち。年長者から伝承的な事柄を学ぶ機会がなく、子育てのノウハウを知らないことを嘆く母親たち。こうした親子に、豊富な人生経験を持つお年寄りの知恵を生かすことができないか…。そんな世代をつなぐ地域のコミュニティづくりへの願いをこめて、全国にさがかけて開設されたのが、大府市の「児童老人福祉センター」でした。

開設後、さまざまな人と人、心と心が触れあう活動を試みましたが、ときには、こんなこともありました。私たちの施設の掃除は老人クラブに委託しています。そのほとんどがカラオケ部のお年寄りです。この清掃をお願いしているお年寄りに親子教室に来ている母親が、「ちょっとおばあちゃん、ここがまだ汚いがね」とまるで掃除のおばさんに言うような文句をつけているのです。たまたまその場に居合わせた私は少々厳しくお話をしました。「お母さん、子どもの前で、お年寄りに文句を言っちゃ駄目よ。ありがとうって感謝しなきゃ。子育てはね、お母さんのまねっこのよ。子どもはね、親が言ったように育つのではなく、親が振る舞ったようにしか育たないの」。私は、若いお母さん方がお年寄りと一緒に生活する機会が少なくなっているなかで、老人クラブの方々との交流は、思いやりの心を知ってもらえるいいチャンスだと考えたのです。



世代をこえる試みが結実した人形劇の発表会

こうした、世代をこえて交流する試みは、毎日が泣いたり笑ったり試行錯誤の連続でした。こんなエピソードもありました。

児童館のクラブ活動のひとつに、子ども人形劇クラブがあります。また老人クラブの活動のなかに大正琴のグループがあります。これをドッキングできないかと考えてみました。大正琴のグループの方には、人形劇の効果音や挿入歌の伴奏をしていただきました。練習時間の違いやリズム感の違いなどがありましたが、大正琴を人前で発表することが好きなお年寄りは、生活態度がなかなか積極的です。孫のような小学生を、かわいい、かわいいと言いながら「わしらに、できるきゃあも。へったくそだがね。そんでもええきゃあね」と協力してくれました。

県で行われた人形劇の発表会の当日のことでした。人形劇は、人間が、舞台の幕の裏で演じるものです。主役は人形です。ところが、おばあさんたちは、真っ白なブラウスとロングのスカート、胸には紫の花とドレスアップをして「さあ、先生、がんばろみやあか」と舞台の前のほうに出てきました。私は困ってしまいました。「せっかくドレスアップしてこられたのにな……」と、思いつつ、とにかく大正琴だけ舞台の前に出して演じることにしました。結果は、県下から集まった八組の中で最優秀賞をいただきました。審査の先生方が「まるで日溜まりの縁側で子どもと老人が優しく触れあっているような感じがにじみでいて、大変素晴らしかった」とほめてくださいました。そして、この日より十年。この子ども

人形劇クラブは、子どもとお年寄りの方々の美しい人間模様を描きながら伝承されています。



地域の教育力が見事に生かされた米づくり体験

次に考えたことは、子どもたちの成長のために、地域の教育力が生かせないか、ということでした。都市化が進んだとはいえ、まだまだのどかな田園風景が残るこの地域。こうした地域のよさを生かした触れあい活動ができないものかと思っていたところ、米づくりの話が持ちあがりました。「おい、おい、子どもはじゃまじゃま！」どろの中をはしゃぎまわる子どもたちを邪魔者扱いするお年寄り。「気持ちわりい！」農作業の経験などない親子は、どろに入ることをいやがります。そんな親子を尻目に、おじいさんたちは黙々と田植えに励みます。「大丈夫かしら」と心配していると「おじいちゃん、すごーい！」と子どもの声。定規で線を引いたように整然と苗を植えていくお年寄りの技にどこからともなく拍手が……。その輪がどんどん広がると、先程までのかたくなだったお年寄りの表情が思わず和んできます。「あんたらも、やってみやあ」悪戦苦闘している親子に、手をとって教えるお年寄りの姿があちこちに見られるようになってきました。こうして、実りの秋を迎え、稲刈り、脱穀が終わると、待ちに待った餅つき大会です。ここは、お父さんの出番と家族にひっぱり出されたお父さん。「わきゃ～ものが、がんばらにやあなあ」お年寄りたちにはっぱをかけられ、お父さんもつい苦笑い。「一、二、三…！」子どもたちのかけ声に、お父さんのへっぴり腰にも思わず力が入ります。

このような体験がくり返されて、それぞれが支え、支えられることを学び合い、地域の中に世代をつなぐコミュニティーがつくられていくとの確信を強く持つことができました。



難病を克服し、新しい幼稚園の開設へ！

昭和五十七年から十六年間の児童館の生活は、本当に充実の毎日でした。その一つひとつの試みのなかで、地域の教育力、家庭の教育力を生かしていくことの大切さを訴えてきました。

私のライフワークは地域に開かれた幼児教育のネットワークをつくることです。「私立の幼稚園の開設に力を貸していただけませんか」そんな話があり、定年を前に児童館をやめ、新たな教育事業に夢ふくらむばかりのときでした。突然の癌の宣告。手術後、リンパに転移するなどさまざまな障害が起きてきました。しかし、「まだまだ、やりたいことがある。こんなことに負けてなるものか」と気持ちを奮い立たせてきました。現在、再発することなく元気に新設幼稚園の開設に向け、全力で取り組んでおります。

いよいよ来年の春には開園です。私は、この幼稚園を、子どもと家庭と地域の「心と心をつなぐ」幼児教育のセンターにできればと、心はずませています。三十二年間、保母として児童館の館長として、そして、何よりも信仰者としてたくさんのことを教えていただきました。その感謝の思いのすべてを託したい、そんな願いをこめ、新設幼稚園のパンフレットにこんな一文をのせさせていただきます。「子どもの幸せな一日の生活は、教師の幸せな気持ちから始まります。子どもにとっての最大の教育環境は教師自身と心得、常識豊かな態度と温かく丁寧な対応に心がけてまいります」と。

いよいよ二十一世紀、私も心新たに人間教育の道を歩んでまいります。

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



輝け！ 地球サイズのボランティア・マインド

足立 由美（福岡県・高等学校教諭）

必修クラブから始まった高校のボランティア活動

七年前の本校は、とくにこれといった特徴もない普通の高校でした。勉強が最優先の高校生活を見ていて「私に何かやれることはないだろうか」「このままでいいのかな」と疑問を感じていました。生徒たちのすばらしい可能性をもっと引き出せるような体験の場は持てないのか。その思いを当時の生徒指導主事の T 先生に相談してみました。すると私が、そのまま生徒指導のボランティア係に指名され、本校における活動を推進していくことになりました。

初めは、週一時間の必修クラブにボランティアクラブをつくり、近くの老人ホームに交代で五～六人ずつ生徒を連れていきました。初めて参加した生徒は、無口なおじいちゃんの横に、同じように黙ったまま、ぎこちなく座っている状態でした。それでも感想を聞くと「楽しかった。また行きたい！」と言うのです。一年後には初めてのボランティア会報も発行でき、核になる生徒も揃いました。

今年の夏行った本校のボランティア活動は、保育園実習や特別養護老人ホームの夏祭りのお手伝い、海岸清掃、街頭募金活動などで、それぞれ三十～七十名、全校生徒一三〇〇名中延二〇〇名の生徒が元気に参加するまでになりました。ここまでするにはいろいろなことがありました。

生徒たちは強制されてやるのは嫌いです。けれども本当は純粋な気持ちで、「機会があればボランティアをやってみたい！」と思っています。

ある日のこと、教室で川清掃の希望者を募るポスターを描いていた生徒に、「がんばるね！ えらいね！」と声をかけたところ、「先生、えらいとか、えらくないとか、そんなんじゃないとよ。これん人もおっといーと、できるもんがすればいいとやけん」と真顔で返されました。この頃になると、はたから見るととても楽しそうに見えたのか、友だち同士で誘い合い、どんどん参加者も増えていきました。

放課後の時間は生徒たちの雑談タイムでいろいろな作業をしながら、彼らの愚痴を聞いたり、生徒同士の会話の中身を耳にしたりと、私にとってもタイムスリップして、第二の青春時代を過ごしているような楽しい時間でした。

このような盛り上がりのなか、ある女生徒の「先生、ボランティアやりたいです。同好会つくりましょう」の声に押されて、平成七年には待望のボランティア同好会が発足しました。初代部長は街頭募金に一人でふらりとやってきたユウジに声をかけてみました。非常にまじめで静かな生徒ですが、休日は髪の毛をはりねずみのように立てるのが楽しみというナイスガイで、思い込んだら一途な性格がありました。

文化祭のチャリティバザーで東南アジアの子どもたちのために学校を建てようがんばったのですが、いろいろな事情から許可がおりず、実現できませんでした。そんなある日突然、校長先生に呼び止められ、「足立先生、うちの学校のボランティアについて、何でもいいから資料を全部持ってきてください」と言われました。今頃何事かと事情をたずねると、校長室に突然ユウジが一人で現れ、「校長先生のボランティアに対する考えを聞かせてください」と一時

間近く話をしたというのです。私はユウジのボランティアに対する真剣さに身の引き締まる思いでした。



生徒たちの積極参加で活動も軌道に

また、もう一つのボランティアの推進役は、私が顧問をする家庭クラブ活動です。本校の職員でソロモン諸島国で青年海外協力隊員を務めたN先生から、派遣先の学校でとくに体育用品が不足していたことをお聞きし、会報を通して学校全体に呼びかけました。集まったものを整理してみると中古のサッカーボールやユニホーム、運動靴など、その量は段ボール箱十七個分にもなりました。

なかでも生徒が置いていった処分寸前の柔道着は山のようにあり、洗濯してみると五十着分がサイズ別にそろいました。ところが、いざ送るとなると、あてにしていた輸送費が出してもらえなくなり、また受け取る相手側も、高い税金が必要で、簡単には送れないことがわかりました。無念な思いのまま、収集品は年を越すことになったのです。

そのような時、新年度の校務分掌に清掃とボランティアを柱にした環境課が新しく作られ、私は主任を命じられました。それまで、有志で行っていたボランティア活動もいよいよ正式な学校行事としてどんどん計画できるようになったのです。

さてこの年は、家庭クラブ連盟の研究発表大会が行われる年で、早くからその中心メンバーをだれにしようかと悩んでいました。その時、頭に浮かんだのは、パワーあふれるサチコの顔でした。廊下ですれ違うたびに私のことを「ゆみちゃん、元気！」と呼んでは手を振るのです。彼女が一年生の時、地域の商店街で街頭募金をした時、初めて参加したわりには、誰よりも大きな声で要領よく内容を伝えていました。その一生懸命な姿に、今まで知らなかった彼女の輝く一面を見たようで、強く印象に残っていたのです。そのサチコたちに家庭クラブの役員になってがんばってみたいか、と声をかけてみると、仲良し四人組で引き受けてくれ、「私たち部活なみにがんばるけんね！」と早速ノートを作り、積極的に委員会を動かしてくれるようになりました。

そんな彼女たちの第一声は、「先生、あの家庭クラブ会報は誰も読みよらんよ。もっとおもしろくせないかん。まず名前を変えようや」でした。あれこれ相談した結果、会報の新名称は、『ただならず』にしたいというのです。辞書によると「ただものでない、素晴らしい」という意味だそうです、自分たちの心意気やイメージにピッタリだからという理由です。私は一瞬ためらいましたが、彼女たちのやる気や自主性を尊重して、「わかった！ 変えよう、これでいこう」と決断しました。

内容も一新した会報『ただならず』は生徒にも先生方にも好評で、よく読まれるようになっていきました。以後、彼女ら四人が職員室に入ってくると、「ただならずがやってきた」と先生方から呼ばれるようになりました。余談ですが、ボランティア会報もこれにならって名前を変え、海苔の佃煮で有名な『江戸むらさき』とつきました。ご飯の友、「いつもあなたのおそばに」という意味らしいのです。



救助物資をやっとの思いで支援先へ

だんだんと生徒たちの手によるボランティア活動が軌道にのっていくなか、いつも頭の片隅に引っかかっていたのが、段ボールに眠っている援助物資のことでした。何とかしなくてはと思いながらも、いたずらに日数だけがたっている状態でした。

八月に入り、福岡でユニバーシアード大会が開かれました。なんとそこへ、ソロモン諸島国からたった一人、陸上の選手がやってくるということがわかったのです。本校の先生から、早速、援助物資のことを話してもらったところ、董是非もって帰りたい藤ということになり、帰国される前の九月四日、本校で目録の贈呈式を行うことができました。

ところが、目録は手渡したものの、コンパクトにまとめた荷物も結局、手荷物の制限内ではほとんど持っていかず、送り返されてきたのです。このことは喜んでる生徒たちにはとても言えませんでした。別に何かいい方法はないかと早速調べ始めました。とにかく私がここであきらめるわけにはいきません。絶対になんとかしてみせるという不動の確信だけはあったことを覚えています。

そんなとき、思いがけない情報が入ってきました。それは、かつて太平洋戦争の時、ソロモンで戦死された方々の遺族会、八十名が一カ月後の十月に、福岡からチャーター便でソロモンの墓参りに行かれるというのです。早速この事をお願いすると、ソロモンのためならと喜んで引き受けてくださり、約百キロの荷物がみなさんの手荷物として、無料で運んでいただくことができました。これですぐに生徒たちの真心が海を越えて伝わったのです。

現地の校長先生からも感謝のお礼状が届きました。生徒たちが喜ぶ陰で、わたしは重かった肩の荷がやっと降りた思いとともに、国際援助活動の難しさをいやというほど実感しました。実はもう今回限りでやめよう、と心ひそかに決意していましたが、彼らの思いは止まりません。もう次のソロモンとの交流のことに意欲満々で目を輝かせているのです。

翌年は、ソロモンの小学校の整備事業のために、手作りのチャリティバザーを行いました。無事に目標の金額と生徒たちの熱いメッセージを送ることができました。現地の日本の方の協力も得て、地域の方々も商品の提供などで協力してくださいました。

半年後に、支援先の小学校から色鮮やかに描かれた素晴らしい絵が四十枚も届きました。サインペンで一生懸命描いたその絵はまさにソロモンの青い空や緑の海そのものです。それを見た生徒達の感動はいうまでもありません。

チャリティバザーの準備で放課後残って一生懸命ビーズ細工や風車を作った生徒たち、それをたくさん買ってくれた生徒、声を張り上げて売り子をした生徒、みんながそのままソロモンにつながったのだと思います。

ソロモンの国旗を知り、場所を知り、そこで雨がふりこむ机や椅子のない教室で学ぶかわいい子どもたちがいることを知っただけでも、勉強だけでは得られない何かを学べたのではないかと考えています。



連続受賞をはたした「ボランティア活動」

さて、前に述べた本校の家庭クラブ活動は、その年、福岡県の研究発表大会で最優秀賞をとることができました。テーマは「輝け！地球サイズのハート・私たちのまめまめし」です。「まめまめし」というのは一生懸命という意味だそうです。また部長のユウジも応募したボランティアの活動論文が「いきいき活動奨励賞の優秀賞」をとりました。そこには、内向的な性格で友人のいなかったユウジが、ボランティアのなかで新しい人生を開いた体験が切々と綴られていました。

その後、二年続けてこのいきいき活動奨励賞は歴代の部長、副部長が特別優秀賞をとり、その副賞の賞金は本校のボランティア活動費に寄付されました。翌年受賞した男子生徒はボーイスカウトにも所属していました。彼は高校入学後、先輩に誘われて、ボランティア同好会に入部しました。そこで彼は様々な活動を行っていきなかに「ボランティアとは何なのか」という小さい頃からの疑問にぶつかります。その疑問を解く鍵がソロモンへのチャリティバザーだったのです。彼は次のように語っています。「バザーでの援助資金を送って半年後、小学校からお礼の手紙とたくさんの絵が

届きました。そのなかに、新しい椅子に座って授業を受けて笑っている子どもたちの写真が同封されていました。これらの写真を見たとき僕は『ボランティアとは人のためにやることではない。自分のためにするのだ。やってあげるのではない。やらせていただくものだ』ということに気がきました。それはお金よりも大切な『心』を得られるものであると思うからです。

今年の五月、僕はボーイスカウトの昇級試験を受けました。面接官から『あなたにとってボランティアとはどんなものですか』と聞かれ、僕は、迷う事なく答えました。『中学校や高校が頭や体の学校であるなら、ボランティアは僕の心の学校です』。この時、自分なりの明確な答えが見つかったと思います。僕はいつまでもこの『心』の学校の生徒であり続けたいと思います」



生徒たちから学んだ黄金の時

こんなに素晴らしい生徒たちと毎年ボランティア活動を続け、昨年度はミャンマーの青少年のためにも本校の支援の輪は広がりました。

三年前に卒業したユウジやサチコたちはそれぞれ希望の進路へ進んでいます。本校のボランティアの基礎を築いたこの学年は、今までほとんどなかった国公立合格の壁を大きく塗り替える成果を出しました。その後も、進路実績は上昇を続け、昨年度は国公立大学に五十一名の合格を勝ち取りました。

この七年間は、私自身が生徒たちからボランティアを学ばせてもらった黄金の時となりました。また、彼ら一人ひとりのなかに、他のために、社会のために役立つという素晴らしい生命が輝いている、そのことを確信することもできました。「輝け！地球サイズのボランティア・マインド」それは私にもできる小さなことから始まって、みんなで大切に育てていくものでした。そして、いつか地球サイズに大きく広がっていったのです。

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



実践のなかで自信を取り戻した高校生たち

田中 良弘 (長崎県)

小学校との交流を提案

農業高校といえば、「こししか入れなかった」と、いやいや入学してくる生徒が多く、大半は非農家の生徒で、農作業を経験したことがありません。高校では入学後すぐに、クワやカマを持たせて農作業をさせます。汗びっしょりになりながら、寒い日も暑い日も雨の日も、いやいやでも働き続けていると、卒業時にはたくましくなって巣立っていきます。

私はシクラメンなど五〇種類ぐらいの草花の作り方を教えていますが、そのなかで印象に残っているのは、二年前に担任となった施設園芸科一年生のクラスの生徒たちです。彼らは無関心、無感動、勉強もできない、何事にも自信がない生徒たちでした。

彼らにやる気を出させるにはどうしたらいいか考えていたとき、以前に担任して、島原・普賢岳の火砕流で校舎を焼失した大野木場小学校に千羽鶴を贈ったことを思い出し、再び大野木場小学校の生徒と交流しようと提案しました。最初は無反応でしたが、ねばり強く対話していくうち、二〇名くらいはやる気を起こしてくれました。そして、未使用のハガキを回収し、それを切手にかえ、さらにギフトセンターで図書券にかえることにしたのです。

生徒たちは行動しはじめると、おもしろくなり、学校近隣への啓蒙パンフレットを作って配布し、知らない家に飛び込みますようになりました。文化祭当日は、普賢岳噴火のパネル展とハガキ回収受付を設けて取り組んだ結果、図書券は六万円分にもなり、生徒も私もびっくりしたものです。

生徒のやる気を起こすには、できない、何をどうやればいいのかのわからない、そういう生徒の気持ちをほぐしてあげることだと気づきました。今回の図書券運動が終わってみて、生徒たちが生き生きとしてきたと実感できました。

心を一つにしてがんばった生徒たち

生徒たちに変化が見られ、私が担当している部活動の生物工学部に生徒が一五人も入部してきました。生物工学部はバイオテクノロジーの基礎的技術を研究しており、目標として、農業クラブの県連大会でプロジェクトを発表しています。それまで四年連続出場し、四回とも優秀賞を獲得してきた部です。ハイテク技術で短時間に、よりいいキクの苗をたくさん作り出す研究を五年前から継続して行ない、今回はそのまとめの段階の研究でした。毎日いろいろな実験や文献調査、データのまとめ、発表準備などをしなければなりません。

今までの生徒にくらべ漢字が書けない、計算ができない、結果を考察することができない、発表力のある生徒がないなどのため、何度も挫折しかかりました。それでも、ていねいに教えていくうちに大会出場のめどがつき、一カ月前から発表者一名、スライド操作者四名、スライドの指示者二名の計七名のチームを作り、一〇分間にスライド七〇枚を使って発表する練習を始めました。しかし、スライドの出し入れを間違えたり、何度もタイミングをはずしたり、発

表者はうまく発音できない箇所があるなど、何度練習してもうまくいかず、大会一週間前には生徒たちは疲れて限界にきていました。そこで生徒を集め、「みんなの気持ちが一つになったら、大きな力になる。心を一つに。そうすれば、ゆつたりと、そして堂々とした発表が必ずできる」と話し、ある卒業生の話をしました。

その卒業生は将来を有望視されていたウエイトリフティングの選手でしたが、体育の実技で首の骨を折ったのでした。一生、車椅子の生活となるかもしれないのに彼は明るく、逆に励まされたこと。その彼が力を振り絞って、後輩のために「皆の気持ちが一つになってこそ大きな力になると思います。がんばってください」と書いてくれたことを話しました。

発表当日、私は感動しました。みんなの力を一つにして最高の発表をしてくれたのです。その結果、みごと最優秀賞を獲得しました。

実践記録をつけていくなかで、気になっている生徒ばかりについて書き、その他の生徒について何も記述していないことに気づかされました。先入観や好き嫌いで生徒を見ていないかどうか、立ち止まって考えていくことができるようになったのです。全員に目を向けるためにも、実践記録を続け、生徒一人ひとりの心がかめようになりたいと思います。

『灯台』(第三文明社)より



教師の元気が生徒を学校を変える

元成 喜一郎 (大阪府・中学校教諭)

面食らった“指導困難校”への転勤

現在勤務する中学校に転勤したのが、六年前の四月のことでした。当時、大阪でこの中学校は、指導困難校のひとつとされていました。同僚から「荒れ方がひどすぎる」「授業が成り立たない」「体が持たない」と会うたびにグチを聞かされていた、その中学校だったのです。

前任校で長年、生活指導部長や生徒指導主事を務め、「荒れ」のど真ん中で走り続けてきたものですから、「もう、ええかげんにしてほしい」「普通の先生になりたい」という気持ちが強く、この転勤には少々抵抗いたしました。

しかし、いろいろな先輩から「君しかない」「君ならできる」と何度も何度も説得されるうちに、「ほな、一丁やったるか」という気持ちに変わっていました。「丈夫が心定めし北の海、波立たば立て、風吹かば吹け」あの北海道開拓の父、依田勉三の詩(うた)が大好きで、北風に向かう男の心境に浸っておりました。

充分、腹をくって転勤したものの、いきなりの三年担任です。しかも学年主任ということが決まっていました。少々、面食らいました。学校の様子も全く分からず、生徒と一面識もないままの人事でした。しかし、戸惑いを感じたのは私一人ではなかったようです。

そして、始業式に臨みました。ズラリと集まった四〇〇人の生徒の中には、短いスカート、ダラーツとした上着、真っ赤な色の学生服、さらに真っ白な制服、さらにキンキラキンの般若の刺繍が入ったものもあります。その他、帽子もスポーツキャップが目立ち、「なるほど聞きしに勝るわ」と感じました。

まず、授業に力を入れました。私の担当は体育です。初めての体育授業。生徒たちは、口々に「先生、ソフトボールしようや」と寄って来ます。

両手をポケットに突っ込んで、いかにもそれらしい雰囲気をつくってくれます。「やれへん」と一言、にらみつけました。「体育は、授業や。遊びとは違う。さあ、ランニングからいこう」と気合いをこめると、ブツブツ言いながらも誰ひとり反抗することなく走りだしたのです。

その後の体操、集団行動もスムーズに運びました。驚いたのは授業後、職員室に戻った時です。そのクラスの担任の女の先生が涙ぐんで話しかけてきたのです。「生徒達が体育で並んで走っている。こんなこと、この学校に来て初めてです。感動しました」と言うのです。このような当たり前の授業が、と思いながらもこの学校の闇の深さを感じずにはいられない出来事でした。

以来、私は常に職員室のムードメーカーを心掛けました。授業のチャイムが鳴っても、気が重くて先生方の腰がなかなか上がりません。そんな時「さあ、今日も授業六回戦や。第一ラウンド開始や。がんばっていこうや」と大声を張り上げて出陣です。

荒れた学校の特徴は、教師にとって、授業の時よりも空きの時間の方が大変だということです。授業を抜け出した生徒の指導、たばこの処理、人の弁当を取ってトイレで食べている生徒の指導など、一つひとつに根気よく対処していかなくてはなりません。さらに、放課後や夜でも、シンナー、深夜徘徊、窃盗など問題発生に対しても二十四時間

体制で構えていなくてはなりません。いやがうえでも、ストレスは溜まります。

そんな毎日が続き、さすがの私もとうとう疲れきってしまい「明日休んでもいいかな」と言うと、他の先生方が「あかんあかん、休んだらあかん。元成先生は、私等の精神安定剤やから。絶対、おらなあかん。しんどかったら朝、学校で生徒に顔見せて保健室で寝ていて」というありさまでした。教師自身のメンタルヘルス、自己管理をどうするかも大きな課題です。

私の場合、そのエネルギー補給の場が創価学会の世界にあります。そこには「冬は必ず春となる」「難来たるをもって安楽と心得べし」との御聖訓に示される徹底した楽観主義、ポジティブ思考があると思っています。

ともあれ、来る日も来る日も闘いの連続でした。



先生方が一丸となった雨の体育祭

私の二十四年間の教員生活のなかで、一つの信念があります。それは、「先生方がまとまり、力を合わせると必ず学校はよくなる」ということです。そのことが、一番はっきりするのは体育祭と文化祭でした。

体育大会は毎年、長居の陸上競技場で行なうことになっていましたが、当日雨で流れてしまいました。この学校では、競技場使用ということがあって雨天中止というのが慣例でした。「体育大会、なしか……それはまずい」。私は、陸上競技場がダメなら学校の運動場でやろうと先生方に提案しました。しかし、運動場は狭いし、三角形に変形しています。それに他校生や先輩が入り込んで、トラブルが起こらないか等、難しい問題もありました。私は、ここが勝負どころと決め、「たとえ狭くても今こそ、教師集団のヤル気を見せようではないか」と再度提案すると、みんなから「よし、やろう！」と賛同を得ることができました。

すぐさま、本校の運動場で行うという企画に練り直しました。狭い運動場に工夫をこらし、一周一六五メートルという変形トラックをつくり、生徒も教師も一丸となって入場門を作り、テントを張り、準備にあたりました。そうして迎えた当日、またしても雨です。それも、すさまじいほどの豪雨です。半日がかりで準備したものを、生徒と共に雨に打たれながら片付けざるをえませんでした。「雨男」の非難は体育主任でもある私に浴びせられます。ここまで来たら、絶対に体育大会はやる。私は祈りました。「どうか、今度は晴天にしてください」

その甲斐あって、ようやく三度目に開催することができました。狭いことが幸いして、生徒は観客の目の前で走り、演技します。長居の陸上競技場では、とても味わえない臨場感です。みんな大満足の表情でした。保護者の方々にも大好評でした。「元成先生、来年も雨を降らせてくださいよ」と言われたときは、疲れの中に満足感がありました。

大成功を踏まえ、今後、体育大会は学校の運動場で行うことに決まりました。

また、秋の文化祭では生徒たちに「クラス発表はシリアスな劇でいこう！」と提案したのですが、生徒達はどうしても聞き入れません。「先生、体育大会が延びたおかげで時間もないし、演技力もないの分かってるやろ」ということで、生徒の結論は「三年一組ギャグ十連発」となりました。不安げな私を尻目に生徒たちは「大丈夫、まかせといてや、先生に絶対に恥かかせへんから」とシナリオから演技練習すべてを自分たちでやり遂げてしまいました。

いつも「俺について来い」でやってきた私ですが、初めて味わう感激でした。このように、この一年を振り返ると、私にとって五年にも十年にも匹敵するような、まるで何幕もの劇を演じたようにさえ思えます。「嵐を恐れず、人の中に飛び込むこと。子どもの中に飛び込むこと。道は必ず開ける」そんなことを教えられた一年でした。



子どもたちの力に感激した新生松竹新喜劇との競演

二年目、三年目と頑張るなかで、荒れた学校もすっかり落ち着いてきました。これからが、いや、これからも私の出番です。

「どうしたら、学校がおもしろくなるか」いつもそんなことを考えていました。「開かれた学校」の特徴を生かして、外部からバレーボールの金メダリストを呼んだり、「選択体育」の利点を生かして、プロサッカー選手に来てもらったり、教師の人間関係、人脈を最大限に生かして、生徒の前に立ってもらいました。そして、いよいよ「おもしろい」を地でいくお笑いの世界からもやってきてくれました。

知人でもある新生松竹新喜劇の曾我さんと話しているうちに、話はひょんな方向に進み、「生徒と一緒に喜劇を作ってみましょ」ということになりました。職員会議で先生方の賛同を得、生徒に話してみると「松竹新喜劇、見たこともない。渋谷天外なんて知らん」と言いながらも、舞台演技と聞き「おもしろそうや、やってみよ」という声が多く、話はすぐにまとまりました。

筋書きは、中学生を巡るドタバタ喜劇です。

商店街のカバン屋に先生がテスト用紙を置き忘れしました。しめた、息子に見せてやろうとするカバン屋の奥さん。それを聞きつけてうちの息子にも、とやって来る教育ママ。キツネとたぬきの化かし合い。ところが、気がつけば、テスト用紙は消えていた……。

この劇の台本と演技指導は松竹新喜劇。舞台装置は美術部。音響は、ブラスバンド部の生演奏、照明も進行も生徒です。そして、出演は生徒十二名、教師五名。新喜劇からは三名のプロが入りました。本校体育館で本番、舞台は一般公開です。新聞社やテレビ局も取材に来て、「松竹新喜劇と先生、生徒が共演」という見出しで大きく報道されました。

生徒たちにこんなにも素晴らしい力があるということ、改めて実感しました。



シンナー撲滅へ、再度の演劇公演

こうして荒れに荒れた学校・地域も落ち着き、私も生徒指導主事になった昨年のことです。

大阪市内で中学生・無職有職少年の、シンナー吸引が話題になってきました。「薬局で中・高生にシンナーを販売している」という話も出て、地域も騒然となりました。またそれに輪をかけ、中学生に覚醒剤使用者まで出てきたのです。地域内五中学の指導主事が中心となり「やったらアカン、シンナー吸引」のポスターを作り、市内のシンナーを扱うお店の内外に貼らせてもらい、啓発運動を進めてきました。

ようやく、苦しかった状態が落ち着いてきたのに、あのしんどさはもう二度と起こしてはならないと先生方もPTAも区内の状況に敏感になりました。「よし、ここで地域を巻き込んで、青少年の健全育成を」と考え、以前、公演でお世話になった「新生松竹新喜劇」の渋谷天外さんと曾我廻家寛太郎さんに連絡し、応援してもらう約束を得ました。管理職、町会や地域の有力者、PTAの役員の方々に、「環境浄化推進協議会」の総会で「シンナーの恐ろしさ、家庭、地域の素晴らしさを、涙と笑いで訴えて行ったらどうでしょう」と訴えました。

トントン拍子に話は進み、一月十九日、大坂天保山の海遊館ホールで『幸子の春—おとうちゃんごめん』を上演することになりました。

新しい父との関係がうまくいかず、非行の道に進みつつある娘。その娘の高校進学のため昼も夜も働き続ける父。

シンナーに手を染めそうになった時に、家庭、地域、友だちの支えで立ち直っていく、泣き笑いのストーリーです。

出演は寛太郎さんら四名、中学生七名、教師三名。また、大阪府警少年課の方に「いま、こんなこと考えて進めてますねん」と話すと、「先生、私たちも協力させていただきます」という返事がきました。「じゃ、警官役を現職警察官がやるということをお願いできますか」と警官の出演も決定しました。

新聞にも、「地元で補導活動をしている現職警官も友情出演」と載り、話題をつくることができました。昼は、生徒中心の公演、夜は、地域住民中心の公演で、どちらもホールの立ち見が出るぐらい盛況でした。「笑いつつ、最後には本当の涙が出てきました」「地域みんなで明るく、住みよい町になるよう頑張ります」「良く内容が分かり、大切なものが見えた気がします」「また、このようなものをやってください」等々、観客の声が公演の大盛況を物語っていました。

この公演を契機として、少年問題等の取り組みも進み、区内に、平和な状態が戻ってきました。生徒の力で、地域に貢献することができたのです。

本校に勤務してはや六年。学校のイメージはすっかり変わりました。校長を中心にまとまりも良く、教科学習もクラブ活動も活発です。私の担当するバレー部も府大会、近畿大会までコマを進めるようになり、昨年、大阪中体連で優秀指導者賞をいただきました。

教育の力は偉大なり、教師の力、生徒の力は素晴らしいと実感しております。これからも、生徒の幸せを願い、学校、地域、社会の輪のなかで人間練磨の道を歩み続けていくことをお誓いして、私の報告とさせていただきます。

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



生徒の反発は私へのラブコール

田中 雅子 (高知県・中学校教諭)



大規模校で三年の主任、しかもクラスは……

人は出会いによって、人生の価値観も変わり、また、多くの感動も味わうものです。

全校生徒十三人の小規模校から、千人近い生徒がいる中学校へ赴任しての一年間は、本当に私にとって忘れることのできない一年となりました。こんな大規模校で、ましてや三年生の主任なんか務まるのだろうかと不安でいっぱいでしたが、「子どもたちと最高の出会いができますように」と真剣に祈り、始業式を迎えました。始業式が終わって、初めての学活の時間。ドキドキしながら教室に行ってみると、なんと教室の中はからっぽ。あっけにとられていると、一人の女子が教室の中をのぞきこみました。すかさず、「うちのクラス？」と聞くと、うなずいたので、「悪いけど、みんなを呼んできてくれん？」と頼みました。しばらくして何人かが、どこからともなくどよどよと入ってきました。

ふと後のロッカーの上にも目をやると、いつのまにか、にしきへびのように寝そべったりあぐらをかいたりしている派手な髪の男子が数人。やっと席に着いたかと思うと、じっとこちらをにらみつけている女子。これが三年A組の子どもたちとの出会いでした。

早速、次の日からは「落ち着いて授業ができない」と、教科を担当している先生方からの苦情の連続です。一時間中、おしゃべりは止むことなく、なかには教室を歩き回る生徒がいるかと思えば、廊下を歩く教師に暴言を吐き、喧嘩をしかける者、窓から飛び出してエスケープしていく生徒までいました。「せめて花でも飾って、教室の雰囲気を変えよう」と思っても、朝、きれいに咲いていたはずの花が、帰日には影も形もなく、花瓶までもが姿を消していました。こんなふうになんかにあたり、反発したりすることでは、自分を表現できない子どもたちのすさんだ心が悲しく、少しでも心を育てたいと真剣に祈りました。

しかし、私の祈りとは裏腹に、赴任して、数日がたった頃、何人かの女子にこう言われました。「今度、あたらしゅう来て、金八先生みたいなことする気やろうけど、いらんことせんとして。あたしらあのクラスは『団結せん』のがモットーやき。どうせ、誰も持ち手がないから、あたらしゅう来た先生が持たされたがやろう。まあ、あと一年やきほうちよって」私も金八先生みたいなことをするつもりもなかったのですが、このクラスを引き受けた以上はそのまま引き下がるわけにはいきません。たとえ人からどう言われようと、自分たちにとっては良いクラスだった、と思えるようになって欲しいと思いました。



粘り強く出し続けた学級通信

そこで、まず自分なりに目標をたててみました。『自分で考えて行動する子』『人に対して思いやりのある子』『感謝のできる子』という三項目です。子どもたちにはこんなふうになって欲しいという願いを込めての目標でした。

また、一年間、自分なりにがんばったことを心にとどめてほしいと思い、一人ひとりが「自分史」を綴ってみようと呼び掛けました。誰も賛成はしてくれませんでした。それから子どもたちの書いた作文をすべてワープロで記録し、それを学級通信で紹介していきました。

こうして、取り組みをしている間も、次から次へと問題は起きていました。

校内での暴力事件、他校との喧嘩、窃盗、飲酒、夜間徘徊、シンナー、喫煙、家出。このような事件が起こるたびに、主任として子どもと向き合わなければなりません。主任といっても、名前だけで、子どもたちは誰一人として、私に本当のことを語ってはくれませんでした。心が通じないことが悲しく「投げ出したい」と何度も思いました。誰か他の先生が対処してくれればいいのに、と思ったりもしました。赴任してわずか三カ月で私の髪の毛は、白髪が目立つようになっていました。

ついに、自分のクラスの生徒が一日に七件も問題を起こした時には「授業もせんといかんのに、どうして体が一つしかないんだろう。もうだめだ」と力が抜けてしまいました。

朝になると「休みたいな」と思い、「でも今日休むと、きっと明日もよう行かん」と思いなおし、なんとか学校に行っていました。

そんな時、池田名誉会長のスピーチのなかの「強い楽観主義」という言葉に、目がとまりました。しんどいことばかりに目が向き、一番大切な子どもの心を見る目が曇っていたことに気がつきました。

もう一度、原点に戻ろうと思いました。「自分が祈って出会った子どもたち」です。「ここで逃げ出してはいけない、どこまでも子どもを信じていこう。必ずよくなっていくんだ」と逃げればかりいた自分を反省し、「何があっても楽観主義でいこう」と腹を決めました。クラスの抱えるたくさんの課題のなかでも、まずは授業がきちんと受けられるようにすることが先決です。しかし、いくらこちらが真剣に訴えても、子どもたちは「また、説教か」と、どんどん反発してきました。そこで、「今の授業について、どう思う？」と、子どもたちに投げかけてみました。また、「自分の人生の目的は何？ それを達成するためには、今、何をしなければならぬと思う？」と次々に考えなければならぬことを問いかけました。そして一人ひとりの考えを作文に書いてもらい、どんどん学級通信で紹介していきました。学級通信も、最初のうちは、帰りの学活で配っても、教室のゴミになるだけでしたが、それでも粘り強く出し続けました。

そうしていくうちに、「今のままではいけない」「私がみんなに迷惑をかけているとは思わなかった」と本音が出てくるようになりまし。そして、それを読んだ子どもから、「友だちの考えがわかったので、一生懸命やっている人を見習っていきいたい」というような感想も出始めました。もちろん、それですぐにクラスが良くなったわけではありませんが、子どもたちの心の中が少しずつ変化している、という手応えを感じました。学年でも一、二を争うほどひどかった授業も、二学期も半ばになると、不思議と落ち着いてきました。思わず、「もしかして、寝てなあい？」と聞くと、「そんなこと言う暇があったら授業進めや」と逆に生徒から言われることもありまし。他のクラスからは、「どんなに落ち着いた授業か見せてもらいたい」と見学者が来るほどになりました。



”ケンジ君”が応援団長に

さて、始業式の日、ロッカーの上に、にしきへびのように寝そべっていたケンジ君。毎日昼からの「社長出勤」。髪の毛を金色、オレンジ色と次々に変化させ、何か事件があると必ず参加していました。

一見、反抗しているように見えた彼ですが、なぜか私の顔を見るたびに、「おかあが待ちゆうぞ。行っちゃれや。おまえの好きなまんじゅうをかうって言いよったき、いつでもえいき、行けや」と言うのです。なぜそんなことを言うのだろう

と不思議に思いましたが、とにかくお母さんに会いに行きました。そして、次の日には、「お母さんはケンジ君を頼りにしゅんやから、あんまり心配かけんとってよ。それとケンジ君がごはん食べゆうか心配ながやから、ごはんくらい家で食べちゃってや」と頼みました。この願いはすぐに聞き入れられました。その後、何度も家庭訪問を繰り返しました。また、学校へ来る前には、「おい、今から学校へ行くぞ」と電話をかけてくるようになりました。参観日の時には、「今から行ってもえいか？」という内容でした。電話を取り次いでくれた先生が、「今日もラブコールがあったね」と言ってくれるほど、ほとんど毎日でした。この頃の私はまだ、彼を完全に信頼していたとはいえませんでした。そんな私の心を彼に試されていたのかもしれませんが、「本当は僕は学校に行きたいんだ」という気持ちが、ラブコールには込められていたのです。

「お腹の具合が悪い」と言っては帰り、

「気分が乗らないから」と言っては帰り、その度ごとに、

「おい、家に帰ってからまた来るき、待ちよけや」

「はいはい、待ちゆうきね。はよう来てよ」

「本当に俺が学校へ戻って来ると思うちゆうがか？」

「思うちゆうよ、学校に戻って来る気がなかったら、そんなこと言わんろう？ みんなも待ちゆうき、できるだけはよう戻っておいで」

こんなやりとりのなかにも、大人に対しての彼の不信、「この人はぼくのことを本当に信じてくれているのだろうか」という思いが伝わってきました。人に自分が信じられているかどうかを確認しないと安心できない彼の心がとても辛く、痛ましく感じられました。

それと同時に、少しずつこちらに心を寄せようとしているケンジ君がいとおしくもありました。

二学期のある日、なんとケンジ君が体育祭の応援団長に選ばれたのです。それまでは学校行事に進んで参加する方ではなかったケンジ君でしたが、それからは一生懸命がんばるようになりました。服装や髪の毛も少しずつ目立たなくなっていました。

そして、彼の晴舞台の日。あらゆる場面で大活躍のケンジ君。入場行進では先頭を堂々と歩き、選手宣誓も見事に行いました。応援合戦の時にはみんなの意気が上がるようにリーダーシップを発揮し、最後まで気を抜かず、競技中の応援にも気を配っていました。体育祭が終わった時、彼の手元には応援賞、行進賞という二枚の表彰状がありました。

学校では、子どもたちの団結を高めるためにも、さまざまなコンクール形式の取り組みがありますが、「団結しない」がモットーだったわがクラスは一度も表彰状をもらったことがありませんでした。いつも「また、今度もダメだったか」と思いつつも、

「うちのクラスは、うちなりにがんばったでねえ」と生徒をほめていました。悔しいので、表彰状も私が自分で勝手につけて飾っていました。

「けんど、本物の表彰状も欲しいねえ」

とつぶやいたこともありました。これを覚えていたのか、二枚の表彰状を手にしたケンジ君は私の方に寄って来て、

「これが欲しかったがやろうが。持ちよけや」

と手渡してくれました。何よりうれしいプレゼントでした。久しぶりに鉛筆を持ったケンジ君の感想文には、「僕が苦労したことは、応援の型を決めることができなかつたけど、みんなが考えてくれたので助かりました。うれしかったことは、応援賞と行進賞を獲ったことです。応援の方は本番でみんなが声を出してくれたのでよかったです。最後の体育祭はいい思い出になりました」

と書かれていました。クラスの仲間もこの作文を見て、

「本当にあいつが書いたかどうか、証拠見せてや」というほどでした。その後、お母さんに話を聞くと、「体育祭の前もですが、終わってから一週間は家で応援団長をするので、毎日が体育祭でした」とうれしそうに話してくれました。「お母さんに見せたい」という一心で、家でも応援をし続けたケンジ君がいじらしく思われました。

それからというもの、お母さんが彼のためにできるだけ時間をつくってくれました。それがうれしらしく、「おい、なんか用事ないかや。言えや。親呼ぶぞ。あいつはいつでも来るぞ」とわざわざ職員室に言いに来る彼の顔は、とても自慢気でした。「ぼくのお母さんは、ぼくのためだったら、何でもしてくれるんだ」という喜びにあふれていました。



タカシ君にあてた「ラブレター」

もう一人、家出を繰り返し、シンナーにも手を出すようになったタカシ君という生徒がいました。

「おはよう」

と声をかければ、

「われ、いてこましたるか」

目が合えば、

「見るなや。むかつく」

とまったく話もできません。近づけば、

「来るなや、うっとうしいわ」

といった状態です。家に訪ねていっても物を投げってくるので入れません。しかし、私に反抗しているというよりも、その時の彼は何かにおびえているという感じさえ見受けられました。なかなか、直接会うことができないので、手紙を書くことにしました。読んでくれるかどうかはわからないけど、タカシ君のことを心配している人がいることを伝えたかったのです。

彼の家庭の中で、タカシ君にもっともかかわっていたのはおばあさんでした。おばあさんはタカシ君が不憫で、しかし、どんどん荒れていく彼をただ見守るだけでした。

「この子は何かがとても辛いのだと思います。それをあたしがわかっちゃれんから、あの子はいらいらするがやろうと思います」

とおばあさんは彼の良き理解者でした。しかし、素直になれないタカシ君はますます荒れていきました。

私は彼に手紙を出し続けました。ある時、彼の友人から、

「先生、あいつに手紙出しゆうか？あいつ俺らあに絶対見せんぞ。何書きゆうが？」

と聞かれました。

「ラブレターよ」と答えながらもなんとなくうれしくなりました。おばあさんから、

「何回かたづけても、先生からの手紙がベッドにあります」

という報告もあり、タカシ君の微妙な心の変化を知ることができました。

そのうち、今までタカシ君に無関心を装っていたクラスの子どもたちも少しずつ働きかけをしてくれるようになりました。電話をかけてくれる者、新聞配達のついでとって、家をのぞいてくれる者、たまに学校に来た彼に、

「おい、弁当食おうぜ」

と誘ってくれる者。方法はいろいろでしたが、彼にとっては「自分の居場所」を確認するきっかけとなったと思います。

面接の練習に標準の制服で

しばらく時間がかかりましたが、徐々に学校へも顔を出すようになってきました。授業に積極的に参加をするということはありませんでしたが、タカシ君の行動に変化が見られたのです。それまでのタカシ君は、なにをするにも私のことは全く眼中になく、自分の世界だけで行動していたのですが、この頃になると、私がタカシ君の方を見ている時に限っていたずらをするようになりました。机をのこぎりで切ったり、ハンダゴテで友達の制服を焼いたり、教室の壁に穴を開けたり。その度ごとに私に叱られるのですが、それが心地良いのか、いい表情をします。まるで、赤ちゃんがお母さんの気を引くためにいたずらをし、叱られることがかまってもらったと思い、うれしい表情をする、といった感じでした。「タカシ君は今、赤ちゃんに戻ったのかもしれない」と内心うれしくなりました。「さあ、次は反抗期だ」と思っていると、やっぱりわがママを言って私を困らせるようになりました。あんまりわがママがひどい時には、「そんなにわがママばかり言うても、いかに。もうちょっとは考えんと言うことを聞いちゃらんよ」と言ったこともあります。

卒業を目前にし、みんなが卒業後の進路を決めようとしていた頃のことです。放課後、突然タカシ君が、「おい、面接の練習せえや」とやって来ました。

「よう来たね。待ちよった。けどその言い方はないやろう。それとそんな派手な頭と制服はなんとかしてからおいで。明日までに面接のせりふも考えて来てね」と注文を出してみました。彼はむっとした表情で帰りましたが、私の心の中には「今までのタカシ君とは違う」という自信のようなものがありました。

次の日、黒い髪、標準の制服姿で彼が登校して来ました。クラスのみんなもびっくりです。

「おまえ、えらいなあ」

とみんなが口々にほめました。

「しょうがないわや、あいつがうるさいき」

と少し照れながら話すタカシ君はいつもより小さく見えました。ボンタンや派手な髪の毛は自分を大きく見せるためだったのか、そう思うと、タカシ君のうって変わった姿に思わず涙が出そうになりました。

子どもたちのなかで一緒に磨かれて

素直な自分を取り戻した彼は、その後進路を決め、周りから信頼される存在になっています。また、一昨年春には「本当にやりたかったこと」に挑戦するため、働きながら専門学校で学ぶことを決めました。新たに挑戦することが決まった時、タカシ君から電話がありました。聞くと、それは彼が中学生の時に私が勧めていた職業だったのです。

「ほら、やっぱりやりたかったがやんか」

「先生がもっと真剣に勧めてくれんかったきよえ」

「一生懸命言うたけど、タカシ君が聞かんかったろう」


とこんなふうには話せるようにもなり、今ががんばっているタカシ君を頼もしく思っています。

この一年間、おもちゃ箱をひっくり返したような毎日でしたが、そのおもちゃ箱の中にはダイヤモンドの心を持った子

どもたちがいました。さまざまな出来事の一つひとつはダイヤモンドの原石を磨く作業だったような気がします。そして、私自身も子どもたちの中で一緒に磨かれました。私一人ががんばってできなかったことも、子どもたちに助けられて、なんとかやりきることができたと、心から感謝しています。こんな素晴らしい子どもたちに出会えて、本当に良かったとしみじみ思います。子どもと共に綴った「自分史」は卒業文集『秘められた想い』として編集し、私の宝物となりました。

これからも、どこまでも子どもの可能性を信じ、子どもの心が見える教師であるために、自分を磨き続けていきたいと思えます。

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



校長室に用意したミルクとクッキーの話 「声かけ」から始まる“心の対話”

馬場 百々子 (富山県)

子どもたちは、ランドセルといっしょに家庭や社会が抱える様々な重い問題を背負って登校してきます。私は、そんな子どもたちを毎朝、校門に立って「おはよう！」と一人ひとりに声をかけて迎えています。ちょっとした「声かけ」でも、心をつなぐことができ、子どもの心の状態を知るきっかけにもなるからです。

体の不調を訴えては保健室に来る子どものなかに、朝食をとってこない、教室で荒れるという問題行動を続ける子が数人いることが分かりました。ある朝、私は二年生の A 君を校門のところで呼びとめて校長室に招きました。「朝にも食べていなくては、勉強にも集中できないでしょう」と、用意しておいた温かいミルクとクッキーを食べさせたのです。わずか一五分ほどの時間でしたが、子どもは家族的な団らんを感じたのか、心を開いてこれまでの生い立ちを語り始めたのです。A 君は「このミルクを飲むと心まで温かくなるね。きょうは家で話したことがないほどいっぱいお話しできたよ」と、うれしそうに教室へ戻っていった姿が今も印象に残っています。

問題行動を起こす子どもたちに「声かけ」をして何気ない会話をしていると、辛い生い立ち(両親の離婚など)のなかで傷つきながらも「良い子」に振る舞おうと懸命になり、自分の感情を抑えられずに乱暴を働いたり、ささいなことで傷つき、ふさぎ込んでしまったりする子が多いのに驚きます。彼らを立ち直らせるカギは、彼らの側に身を寄せて真剣に彼らのことを分かってあげようとする大人からの歩みよりです。大人の温かいまなざしと子どもの心の変化に敏感に対応する洞察力があれば、適切な「声かけ」ができ、子どもたちは持ち前の豊かな心を開いて立ち直り、自立していくのです。

『グラフ SGI』(聖教新聞社)より



全面的に受容することで変わった A 君

高橋 庸子 (東京都)

子どものすべてを受け入れる

担当になった二歳児クラスに、A 君がいました。彼は先生に注意されると、床にひっくりかえってわめく。玩具をひとり占めにする。他の子どもをたたく。玩具を投げる。食事は手づかみ。食べたくないものは床に落とす。昼寝の時間は走り回る。そんな A 君に他の子どもたちはおびえて泣き、私たち保育士も手をやいていました。

A 君は一歳のとき両親が離婚したため、現在、母の実家で肩身の狭い思いで暮らしています。A 君はいつも誰かに叱られているらしく、家のなかに居場所がないようでした。

私は、A 君が身近な大人たちから愛されていると感じとれるようにしたいと思いました。そして、「A 君を絶対に叱らない」「要求や押しつけはしないでいっしょに行なう」と決意したのです。

A 君は登園すると、必ず、友だちの遊んでいる物を壊してまわります。はじめは「またはじまるぞ」と見ていましたが、実はみんなに自分の存在をアピールしているのではないかと思えるようになりました。

そこで、私は靴箱の所から A 君の声が聞こえると、「A ちゃんが来たよ」とみんなに知らせ、A 君が私を見つける前に「A ちゃん、おはよう」と声をかけるようにしました。そうすると、朝の独特な行動が見られなくなったのです。

食事時のパニックも、原因は大人側の押しつけではないかと考え、嫌いなものは食べたくない気持ちを受け入れるようにしました。他の先生たちから「わがままになる」と言われましたが、確信をもってすすめたのです。

A 君が変わってきました。「よく食べられるようになったね」とほめ、A 君の要求を受け入れていくと、A 君は気持ちよく食事ができるようになったのです。昼寝のときも、A 君のそばに一番先に行くようにすると、うれしそうに布団に入って待っています。

そして、A 君は私といっしょに遊ぼうとするようになったのです。遊ぶうちに、彼は電車が好きで、日本全国の電車の名前を知っていることがわかってきました。記憶力がすばらしいのです。A 君のよい部分を他の職員に知らせ、ひとりでも多くの人に、A 君に声をかけてもらうようにしたところ、大人たちの A 君を見る目が変わってきました。

人を信頼できるようになった A 君

次の課題は友だちと遊ぶことです。A 君は人との関わり方がわからないので、いっしょに遊びたいのに、友だちのつくった物をわざと壊してしまう。そこで、まず私と A 君が遊んでいるとき、他の子どもを誘うことにしました。電車の図鑑を見ているときは電車の好きな子、虫の図鑑を見ているときは虫の好きな子といっしょに見て楽しみました。

A 君は好きな遊びはしますが、それ以外の遊びはしません。A 君は自分自身に自信がないからできないのではないかと思いました。いつも大人から叱られて育っているうちに、自信をなくしてしまっているのです。

一つひとつじっくりと対応していこうと決めました。「できない」と言ってやろうとしないA君に、「先生が手伝ってあげるから、やってみようね」とA君の気持ちを受け入れてから、自分で挑戦できるように援助しました。少しずついろいろなことができるようになり、自信が持てるようになっていったのです。

一方で、お母さんにA君のことを伝え、ほめてあげてほしいと頼みました。話を聞いてみると、お母さんも大変でした。仕事をしながら、祖父母の家事もすべて引き受けているのです。「ひとりで背負わないで、祖父母に甘えてみたら」と提案しているうちに、A君の家庭が少しずつ変わってきました。

お母さんに代わって、祖父がA君を迎えにきたこともありました。どんなに熱を出しても迎えに来なかったお母さんが、仕事を休んで迎えにきたときは、ほんとうにうれしそうでした。まわりの大人に愛されていると感じはじめ、A君に自信がついてくると、夏のプール、秋の運動会に積極的に取り組むようになったのです。

実践記録をとおして、A君の成長した姿をたくさん発見しました。なかでも、人を信頼することができるようになったことが一番うれしいことでした。私自身もA君をとおして、保育の基本は「受容すること」だと学ぶことができ、成長できたと思います。今後も自分を磨き、いつでも子どもの側に立った器の大きな保育士になりたいと、あらためて決意しました。

『灯台』(第三文明社)より



ウルトラマンティガのように

石川 恭子 (神奈川県・養護施設児童指導員)



葛藤と焦りが続く、五歳の太郎との毎日

私は養護施設指導員として、家庭に事情のある子どもたちを預かり、親の代わりに一緒に生活して、自立させていく仕事をしています。私が養護施設指導員になってから六年目になりました。現在はグループホームという形態で二階建ての建物で子どもたち五人とともに生活しています。

この私のグループホームに太郎が弟とやって来たのは、去年の七月の終わりです。初めて出会った時から太郎との生活は、「こんなはずじゃない」ということばかりでした。

人懐っこいのに顔つきはきつく、どこかふわふわした感じで目が合わない子でした。五歳にしては単語数は少なく、よく「あれあれ」と指示語を使います。びっくりしたのは、初めて私のホームに来たとき、知らないところへ連れてこられたのに、母親が帰っていく姿にまったく反応しなかったことです。バイバイと言うものの玄関先にも行きませんでした。

私は、「あんたを嫌いで叱っているんじゃないだよ」と言いながら育ててきたという母親の言葉を思い返し、母親との関係が薄いのに気がつきました。

太郎は生活のなかで気に入らないとかんしゃくを起こし、わめき散らす。極端に我慢できず、「いやだ！」と叫びまくる。バスで空いている席がないと「おれの座る所がねーじゃないかよ」と大声を出す。太郎には兄という自覚はなく、聞き分けがよい弟に比べ、まったくワケが分からないという感じです。

兄弟喧嘩はすさまじく、お互いに威嚇しあったり、弟を完全にやっつけないと自分が殺されると思い込み、殺るか殺られるかという切迫感が伝わってくるほどでした。喧嘩をした後、「ごめんね」と言っても太郎は、相手がいいよというまで「ごめんっていつてんだろう」と怒鳴りまくる。鉛筆の先を弟に向けて飛びかかろうとした時、大声で止めに入った私に向かって、「いい加減にしろ」とこぶしをあげてきます。ささいなことから始まるこの兄弟喧嘩は、一日中何度でも繰り返されました。太郎はまた、ずいぶん大人の性についても知っている様子でした。子どもとして、今知るべきこと、感じることも知らず、今は知らなくてもいいことをたくさん覚えさせられていると感じました。

こんな毎日の生活のなかで、私もへとへとになり「これじゃあ、九月からとも幼稚園へは行かせられない」という不安でいっぱいになりました。太郎の攻撃性への嫌悪感で、できればかわりたくないという気持ちでした。「このままご飯を食べさせて、おやつをあげて、お風呂に入り、一緒に眠っていれば大きくなるじゃないか。いや、このまま大きくしてしまったら、太郎はどう生きていくのか、今が大事だ。今だったら取り戻せる」と私の胸はそんな葛藤と焦りばかりで、目の前のたった五歳の幼児が嫌で一緒に生活していく自信がなくなっていきました。

こんなにふうに幼児がかわいくないと感じたのは初めてでした。そんな自分を励ましながら、「どうか太郎に、失った子どもらしさを取り戻せる力をください」と必死で祈っていきました。



太郎の母親への共感がきっかけとなって

太郎がこのような状態にいるのは、母親との関係が大きく影響しているのではないかと考え、そのことを含め、太郎が今までどのように育てられてきたのか、どうしてこの施設に来ることになったのかなどの、問題発生の要因を自分なりに仮説を立てて再検討してみました。そして太郎の過去の境遇にどれだけ共感できるか考えていきました。

再検討課題の第一は、子どもの世界から遠ざからなければならなかった理由です。太郎は、初めはぬいぐるみをかわいいと感じなかった。絵本も子ども向けのテレビも興味を示さず、手遊びも楽しいと感ぜず笑いません。そんな太郎の唯一の遊びがウルトラマンティガになる空想遊びでした。

二歳から四歳の歩行期の遊びのなかに、空想遊びがあります。自分が作り出したイメージに応じて遊ぶことができる。従わなければならない規則も他人に分かってもらわなければならない欲求もない。イライラや寂しさは、想像の中ではたやすく出せたり静められたりする。空想遊びと現実とを一緒にすることは、子どもならよくあることですが、太郎の場合、空想の世界の方が居心地がいいのではないのか。だから一日の大半を一人で空想遊びをし、ひどい死闘のような時すらウルトラマンティガになっているのだろう。いったい、太郎はどんな世界に自分を置いてウルトラマンティガになってしまったのか。

また、兄弟喧嘩の殺るか殺られるかという切羽詰まった感覚は、今までの生活の中で、どう身につけてしまったのだろうか。

家庭内では、暴力を続け、金銭のトラブルが多く、精神的に幼い太郎の父親と離婚した母親はサービス業である自分の仕事場へ太郎を連れていっています。このことは、ほぼ完全に太郎を子どもの世界から遠ざけてしまったのではないかと私は考えます。

その場所で知らなくてもいいことを覚えさせられ、まるでテレビを見るように太郎は大人たちの性を見ていたのかもしれない。母親やその場の大人たちが太郎に対して、おもしろがり、気づかないうちにしていたことが、性的虐待につながっていたのに大人は気づいていたのだろうか？ 夜の世界の大人たちのなかで、ウルトラマンティガという空想遊びが唯一の子どもらしさを守れる世界だったのです。

母親は太郎を一人だけ置いて自分が夜仕事場へ行けるはずもなく、職場では太郎を誰かしら見てくれるので、都合がよかったのかもしれない。

太郎の母親はやはり一歳で両親が離婚し、三歳で里親に預けられたという生い立ちを持っていました。そこでの母親は里親に受け入れてもらえず、疎外感ばかり感じながら成長していったようです。きっとその頃の母親の思いは、強くなりたい、こんなんじゃないと反発し、意地を張り、ぎりぎりの精神状態が、この世界はやるかやられるか、という切迫感を生み出していったのでしょう。その思いが、共に生きてきた太郎にそのまま伝わってしまっているようでした。自分はそんなに悪い子だったんだろうかという葛藤をいつも抱え、人間への不信感からくる不安、自分の存在への不安、受け入れられたと感じたことのない不安が、どんどん酒におぼれ、体をむしばみ、精神を不安定にさせ、夜の仕事しかできない状況をつくってしまったのです。

このことが、あらゆるリズムを崩し、その結果、太郎は、子どもの世界から遠ざかることになってしまったのでしょう。子どもにとってのよい環境を考えるより、自分ができる仕事をし、今日を二人の子どもと生きてきた、そんな母親を責めることはやっぱりできません。

私が、再検討をしていった時に胸をしめつけられたのは、この太郎の母親の過去の大変な思いでした。私と同年の太郎の母親のことを一つひとつ考えていくと胸の詰まる思いがこみ上げ、太郎を大切に育てたい。この母親をしっかり受け入れて信頼関係を築きたいと深く感じました。

こうして大変だった母親の過去の思いに共感できた時、私は、現在の太郎を受け入れることができたのです。



ほどけていく太郎の心に喜び

それからの私は、養育関係づくりを太郎としていきました。まず依存期待関係を結び、太郎にとって望ましい養育者であると認められてから、次に、部分信頼関係づくりをしました。太郎への依存期待関係の考え方は、太郎の依存欲求をすべて私に依存させて、太郎がいないと私は寂しいよと太郎に依存します。また太郎には、自分を本当にかわいがってくれる大人であり、自分が期待されていると知れば、太郎も子どもの世界を取り戻せる力があると私は期待しました。

一日中何度もだっこ、おんぶをし、必ず膝の上に乗せ、太郎の目に向かって語り掛けました。「太郎はいい子だね。かわいいね。おやつに何を食べようか。幼稚園のお話聞かせて、ねえ、私の目を見てごらん。目を見てにこって笑ってみて」と何十回も語りかけました。

うす目を開けて、左右に揺れる目に「人に語りかけてもらっていることに慣れてほしい」と願いました。また、聞いていようがいまいが、楽しそうに絵本を読んだり、歌を歌ったりしてさまざまな感情表現の刺激をし、情緒関係を結べるように考えました。ある時、「ぐるんぱの幼稚園」を読んでいると、向こうの方で、『さみしい』って何？と聞いてきました。私は、しめたと思いました。「独りぼっちでいることや、大好きな人がいなくなってしまうと寂しいって思うんだよ。私は太郎がいなくなったら本当にさみしいよ」と伝えたのです。

それから数日後、幼稚園から帰ってくる時「僕がいなくてさみしかった？」と聞いてくるようになりました。「そうね。だから太郎が帰ってくるのを楽しみに待っていたよ」と声かけをすると、うれしそうでした。でも、相変わらず死闘の喧嘩をしたあとで太郎は、ワケの解らない文句の連発。そういうときは「自分が悪いと分からないなら、もういい。お部屋へ行きなさい」とその場から離し、まったく相手にしませんでした。太郎は大声で泣き叫び、文句を言った後に「ごめんなさい」と初めて自分の気持ちを伝えてきたのです。自分が悪いことに素直になれたことをほめてあげました。私としても冷静さを失ったら、きっと太郎をひっぱたいていたかもしれません。それくらい手がつけられなくなるのです。本当にワケが分からないのかそれともただ怒りの感情がコントロールできないのか？ ずっと観察してきて、この日、太郎には怒りの感情をコントロールすることができないのだと気づいたのです。

部分信頼関係づくりは、今も続いています。部分信頼の拡大が信頼関係を強化していくからです。一番初めにどのようの部分信頼したかという、私が太郎が見せ始めた優しさや感受性の部分を信頼し、太郎の怒りの感情がコントロールできなくて困っている気持ちを「わかっているよ」と伝えて信頼させていきました。「信頼しているよ」と伝えてもまだピンとこない年齢なので、たっぷりとほめることにしました。

太郎が幼稚園から帰ってきたときすぐに、「花瓶の花が変わっているよ」と言ったときに、「太郎はよく気がつくね。この花可愛いでしょう」と語りかけました。「太郎は優しいね。そういうところが、大好きだよ」と伝えていくたびに太郎もっこと反応してきました。また、けんかの時も、「だれが悪いの？」と語りかけ、「僕が悪い」と言ってポロポロ泣くたびに、「自分が悪いと分かったのは偉いよ。そうしたら『ごめんね』って謝らないとね。太郎は『ごめんね』って、なかなか言えないんだよ。でもさ、落ちついたら言えるんじゃない」と伝えると「うん」と言って、また泣きました。

こんなふうな、養育関係づくりをしていった後の太郎の変化は、まず、私と目が合うようになったことです。そのときの喜びは忘れられません。九月六日、幼稚園の先生と歌を歌ったことを話してくれた時でした。それから、表情も出て、豊かな感受性を表す言葉も多くなりました。依存心がきちんと育ち始め、私を養育者として受け入れ始めたので

す。



大好きなウルトラマンティガのように

現在は、太郎の発達課題や親子関係の調整に取り組んでいます。そして、一日数十回も必ずしていた殺るか殺られるかの喧嘩はなくなり、太郎の攻撃性は消えました。基本的な欲求を満たしているので、弱かった耐性が元に戻ってきたのです。


今は、太郎は一年生です。クラスで一番小さいのですが元気いっぱいです。いつも先生に指して欲しくて大声で「ハイ」と言っています。もちろん答えなんて考えてないし、指されてから考えたりしているんです。私が机に向かっていると「勉強がんばってね」とか「ご飯おいしかった」とか、忙しそうにしているのがわかるのか、「大変だね」と人を思いやる言葉が増え、こちらの方がやさしい気持ちになってしまいます。

私は、他人の子を育てるこの仕事に社会的責任を感じています。そして、私の使命だと強く思っています。それはきっと、私の母が私を楽しみながら育ててくれたからだと思います。私の父親は、アルコール依存症で、私たち三人は小さい頃から施設に入ってもおかしくない状況の中で育ちました。暴力と借金地獄の中でも、母は私たちを育てきり、病気になって亡くなりました。養育者になりたいという私の生き方を母は理解し、私を精いっぱい応援してくれました。

この仕事をしていて、落ち込むことがたくさんあります。でもそんなとき、私を最大に理解し応援してくれていた母を思うと、生命と引き換えに大切に育ててもらった私が、担当の子どもたちを支えられないはずはないと、自分を励ましています。

太郎には、過去に負けず、大好きなウルトラマンティガのように強く、大きく成長してほしいと祈っています。

『教育の目指すべき道』(鳳書院)より



「座席表による授業記録」が教えてくれたもの 毎日のデータの集積で得た自己“再発見”

真鍋 孝徳（北海道）

「行動」には、その子なりの理由がある。それを分かってあげなければ、修正も激励もできません。これは、私が生徒との関わりの中で学んだ教訓です。

親でも教師でも、自分の人生経験からどうしても子どもの行動を押し量りがちです。しかし、大人には納得できない生徒の行動でも、頭ごなしに否定したのでは、反発されます。

私は、前任校が校内暴力で荒れ、生徒の心をつかみかねて大変悩みました。その時、試みたのが「座席表による授業記録」の実践でした。自分の態度や言動や生徒との関わりを毎日、座席表上にチェックし、客観的に分析してみたのです。データは想像以上に、死角となっている生徒がいることを浮かび上がらせました。クラス四〇人の生徒をわけ隔てなしに接しているつもりでしたが、なんと一年間に一度も授業で話を交わしたことの無い生徒が一〇人もいたのです。私はがく然とさせられました。

それも、目立たない、おとなしい、特に手の掛からない生徒ほど対話が無く、関わりが薄かったのです。「記録」は、自分の教育者としての姿勢を正す「鏡」となりました。

授業中におしゃべりしている子、消しゴムをいじっている子、揚げ足をとる子……。それは、授業がおもしろくない、興味がない、分からないという“サイン”でした。ダメな生徒と決めつけていたのは、こちらの傲慢さと気づきました。こちらが心から反省できたとき、クラスの雰囲気は一変しました。

『グラフ SGI』（聖教新聞社）より



「はっとメモ」で見えてきた キラリと光る子どもの個性

宮川 敬子（茨城県）



A君もB君も作れたぞうさん

茨城県教育本部では「今、子どもが見えていますか」をテーマに実践記録運動の一つとして「はっとメモ運動」を展開しています。つくば市で行われた「第一七回全国人間教育実践報告大会」の折に研究発表して大きな反響を呼びました。これは日常の教育現場で子どもたちの会話や振る舞いに触れ、「はっ」とした経験を記録していくものです。授業中ばかりでなく、休憩時間や放課後の子どもたちにも目を向けています。

小学一年生を担当して三年目の昨年四月から、私も「はっとメモ」をつけるようになりました。次にその一例を紹介します。六月二十四日（木）図工で粘土細工をしているとき、A君は「作れな～い」となにもしない。「何を作ろうか」と聞いても「わかんない」と言う。「動物を作ってみようか。じゃ、ぞうにしよう」と提案し、まず粘土のかたまりを丸くする方法や平らにする方法を教えた。それから胴・足・顔と作る順番を教えた。A君が三分の二以上を作った。ぞうができるかと「今度きりんを作る。どうやって作るの?」と聞いてきた。ぞうよりも足を長くしよう、首も長くしようとヒントを与えたら、今度は自分できりんを作ることができ、大変うれしそうだった。

A君は一学期にはまだ自分の力で粘土細工のできない子でした。粘土をどのようにこねるのか、何を作るのか、どのように作ったらいいのかわかりません。この日はA君にかかわってみようと決めて授業に入り、その結果をメモにしました。

A君がぞうを作るのを見て、となりのB君もぞうを作りはじめ、できあがると、今度は自主的に大きな亀とかぶとむしを作っていました。私がほんの少しヒントを与えただけで、二人の子どもは粘土細工ができるようになったのです。「はっとメモ」をはじめた当初は、積極的な子や落ち着きのない子など目立つ子ばかりに目を向けがちでしたが、そのうち一人ひとりのキラリと光るよい面に気づくようになってきたのです。



話を聞くことで子どもの背景が見えてきた

メモをとろうと意識することで、子どもの話しを全部聞こうという姿勢になりました。また、メモがあるともう一度振り返る時間ができるようになり、子どもたちの行動にもそれぞれ理由があることがわかってきました。そして生徒のどういった面を見ていくかに気づかされ、テーマが見えるようになりました。

C君はよく「死ぬ」「殺す」ということばを使います。話を聞いてみると、ファミコンでしか遊んでいないのです。その子に「そんなことばを使ってはいけません」といってもあまり効果はありません。そこでクラスでうさぎを飼うことにしました。

以前は授業のなかでのみ動物の世話をしていたのですが、昼休みなどにも生徒に開放し、世話をすることをおして、動物と触れ合う機会を多くしたのです。

C君を見ていると、生き物は好きだけれども、扱い方が乱暴です。えさを与えるにしても、うさぎが食べないと無理やり口につっこんだりするのです。どのようにうさぎと接していいのかわからないようなのです。しかし、ほかの子どもたちが、うさぎの警戒心を解いてかわいがると、自然とうさぎがえさを食べるのを見て、少しずつうさぎとの接し方がわかってきたようです。



自分が見えてくる「はっとメモ」

以前の私でしたら、子どもたちを指導しなければいけないという姿勢で子どもたちにかかわっていたと思います。「はっとメモ」をつけるようになって、子どもを受け入れることができるようになりましたし、私自身、ことばを慎重に選んで話すようになりました。

この「はっとメモ」は、続けなければ意味がありません。最初は生徒が下校したあとノートにまとめていましたが、子どもたちのちょっとしたことばや行動を忘れてしまうこともありましたが、まとめる時間をとろうとしても忙しくてできないこともありました。

そこで、わら半紙を切ったメモ用紙を教室に置き、はっとしたとき、すぐにメモできるようにしました。そのメモをまたノートに書き写していましたが、これも時間をとられてしまうので、現在はメモをノートにそのまま貼りつけるようにしています。これなら長続きできるという「自分流」でいいと思います。

記録をとることは、生徒一人ひとりとかかわる手助けになります。私がどのように生徒とかかわっているのか、どんなことばを使っているのかなど、私自身が見えてくるのです。これは「はっとメモ」の大きな成果だったと思います。

『灯台』(第三文明社)より